

# 松代城下町跡（6）

～片羽町・伊勢町～

—長野信用金庫松代支店改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2023 年 3 月

長野市教育委員会

# 松代城下町跡（6）

## ～片羽町・伊勢町～

—長野信用金庫松代支店改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2023 年 3 月

長野市教育委員会



## 序

彩り豊かな山並みを仰ぎ、千曲川・犀川の大河に抱かれた長野市では、悠久の歴史の中で、多様な人々の生活が営まれてきました。各地に残る伝統行事や歴史的建造物などの文化財は、郷土の成り立ちや文化を理解する上で欠くことのできないものです。中でも土地に埋蔵されている遺跡やそこに存在する遺構・遺物は、私たちの祖先の知恵と文化の集積であるとともに、当時の人々の暮らしぶりを現在に伝えてくれる貴重な財産です。

ここに長野市の埋蔵文化財第168集として刊行いたします本書は、長野信用金庫松代支店改築工事に伴って実施した松代城下町跡に関する調査報告書です。

発掘調査では、近世から近代にかけての土坑や水路を発見したほか、江戸中期の松代藩家老として著名な恩田木工の名前が記された木簡が発見されました。

この調査成果が地域の歴史解明の一助として、そして文化財保護に広くご活用いただければ幸いります。

最後に、埋蔵文化財保護に対する深いご理解のもと、この調査にご協力いただいた事業者並びに地域の皆様方に厚く御礼申し上げます。

令和5年3月

長野市教育委員会  
教育長 丸山 陽一

## 例言

- 1 本書は、長野県長野市松代町における「長野信用金庫松代支店改築工事」に伴い、記録保存を目的に実施された埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
- 2 発掘調査地は、長野県長野市松代町伊勢町 170-1 外に所在し、松代城下町跡内に位置している。
- 3 発掘調査の実施については、事業主体者である長野信用金庫 理事長 市川公一からの委託により、長野市長 加藤久雄が受託し、長野市教育委員会が直営事業として実施した。なお、調査は長野市埋蔵文化財センターが担当した。
- 4 埋蔵文化財の保護対象範囲は、開発事業面積 1,447m<sup>2</sup>の全域である。このうち既存建物解体範囲の約 77m<sup>2</sup>以上を予備調査対象範囲、新規建物計画範囲の約 186m<sup>2</sup>以上を発掘調査対象範囲とし、調査を行った。なお実質調査面積は予備調査約 56m<sup>2</sup>、発掘調査約 214m<sup>2</sup>である。
- 5 現地における調査は、予備調査を令和 3 年 2 月 9 日から同年 2 月 15 日、発掘調査を令和 3 年 4 月 1 日から同年 4 月 28 日まで行った。
- 6 現地における発掘調査および本書の編集・執筆は、飯島の指導の下、井出が担当した。
- 7 出土した木簡 2 点については、株式会社吉田生物研究所に委託し、保存処理および樹種同定を行った。
- 8 調査で得られた諸資料は、長野市埋蔵文化財センターで保管している。出土遺物の注記号はアルファベットの「M J S M」である。
- 9 発掘調査の実施に際し、委託者である長野信用金庫におかれては、埋蔵文化財に対して深いご理解を頂き、多大なご協力を賜った。

## 凡例

本書では、調査によって確認された遺構・遺物について、その基本的資料を提示することに主眼を置いた。資料掲載の要領は以下の通りである。

- 1 基準点測量および遺構測量は、平面直角座標系（国家座標）の第Ⅷ系（東経 138° 30' 00"、北緯 36° 00' 00"）の座標値（日本測地系 2011）と日本水準原点の標高を基準とし、株式会社写真測図研究所に委託した。
- 2 掘査した地図は上方が真北を示す。また、実測図等に掲載した方位は全て座標北を表している。
- 3 掘査した遺構図、遺物実測図の縮尺は各図版に提示した。
- 4 掘査した遺構写真、遺物写真的縮尺は任意である。
- 5 遺構の略記号は以下の通りである。遺構番号は現場で付した通し番号を基本とし、整理調査時の検討によって欠番となったものについては、検出遺構一覧表において旧番号と欠番表記を併記した。  
土坑：S K 小穴：S P 性格不明遺構：S X
- 6 検出遺構一覧表および遺物観察表において、遺構の規模、遺物法量の欄の括弧付きの数字は残存値を示す。
- 7 遺構実測図において遺構の推定ラインを破線で示した。
- 8 遺物実測図において、施釉陶磁器の釉端部は一点鎖線または断面に「▲」で示した。
- 9 木簡の釦文は、木簡学会編『木簡研究』の表記法に従った。
- 10 土層の色調記載は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』によるものである。

## 目次

序

例言・凡例

目次

### 第1章 調査経過

第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査体制	2
第3節 試掘調査の成果	3
第4節 調査経過	3
第2章 調査地周辺の環境	
第1節 地理的環境	4
第2節 歴史的環境	4
第3章 予備調査の成果	
第1節 調査の方法	8
第2節 層序	8
第3節 発見された遺構と遺物	8
第4章 調査の成果	
第1節 調査の方法	11
第2節 層序	11
第3節 発見された遺構と遺物	15
第5章 総括	34

引用・参考文献

報告書抄録

## 挿図目次

第1図 発掘調査地点位置図	1	第17図 SD03 竹桶縛手実測図	20
第2図 試掘調査位置図	3	第18図 SX07 実測図	21
第3図 周辺の主な遺跡	5	第19図 SX07 実測図	21
第4図 周辺の調査地位位置図	7	第20図 SX05・07 出土遺物実測図	22
第5図 調査区設定図	8	第21図 SX09・SK03 実測図	23
第6図 予備調査区土層柱状図	8	第22図 SK03 出土遺物実測図(1)	24
第7図 予備調査1区3次確認面実測図	9	第23図 SK03 出土遺物実測図(2)	25
第8図 予備調査出土遺物実測図	10	第24図 SK03 出土遺物実測図(3)	26
第9図 調査区全体図	12	第25図 SX09 出土遺物実測図(1)	27
第10図 調査区セクション図(1)	13	第26図 SX09 出土遺物実測図(2)	28
第11図 調査区セクション図(2)	14	第27図 SK01・02・SP01 実測図	29
第12図 SD01・02 実測図	16	第28図 SK01 出土遺物実測図(1)	29
第13図 SX03 実測図	16	第29図 SK01 出土遺物実測図(2)	30
第14図 SD01 出土遺物実測図	17	第30図 遺構外出土遺物実測図(1)	31
第15図 SX01・03・06 出土遺物実測図	18	第31図 遺構外出土遺物実測図(2)	32
第16図 SD03 実測図	19	第32図 調査地の屋敷剝復元図	35

## 表目次

第1表 予備調査出土遺物観察表	10	第8表 SK03 出土遺物観察表(2)	24
第2表 檢出遺構一覧表	11	第9表 SK03 出土遺物観察表(3)	26
第3表 SD01出土遺物観察表	17	第10表 SX09出土遺物観察表(1)	28
第4表 SX01・03・06出土遺物観察表	18	第11表 SX09出土遺物観察表(2)	28
第5表 SD03出土遺物観察表	20	第12表 SK01出土遺物観察表(1)	29
第6表 SX05・07出土遺物観察表	22	第13表 SK01出土遺物観察表(2)	30
第7表 SK03出土遺物観察表(1)	24	第14表 遺構外出土遺物観察表	33

## 写真目次

写真1 予備調査I区3次確認面全景	9
写真2 予備調査I区1号遺構検出	9
写真3 調査区分南壁断面	14
写真4 調査区分東壁断面	14
写真5 竹縄継手	21

### 写真図版1

1. 1次確認面全景（左が北）
  2. 2次確認面全景（南から）
- 写真図版2
1. SD01・02検出（左が北）
  2. SD01検出（南から）
  3. SD01断面（南から）
  4. SD02検出（南から）
  5. SD02検出（北から）

### 写真図版3

1. SD01遺物出土状況（西から）
2. SX05断面（南から）
3. SX06検出（南から）
4. SX06遺物出土状況（東から）
5. SD03検出（北から）

### 写真図版4

1. SD03検出（東から）
2. SD03交点検出（東から）
3. SD03交点検出（西から）
4. SD03南壁断面（北から）
5. SK03検出（東から）
6. SK03完掘（北から）
7. SK03漆器碗出土状況（南から）
8. SK03調査風景（東から）

### 写真図版5

1. SK03材木検出（東から）
2. SX09完掘・SK03検出（南から）
3. SX09遺物出土状況（西から）
4. SX09遺物出土状況（西から）
5. SK01遺物出土状況（西から）

# 第1章 調査経過

## 第1節 調査に至る経緯

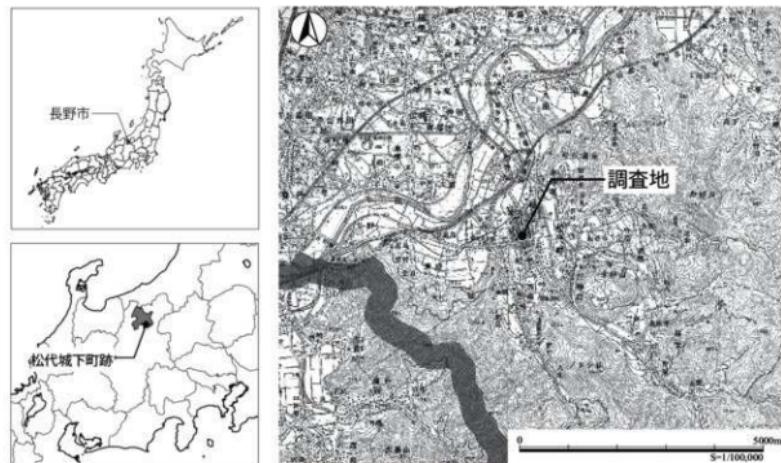
事業主体者である長野信用金庫理事長市川公一（以下、事業者）より、松代町松代字伊勢町 170-1 外における長野信用金庫松代支店改築工事に伴う文化財保護法第 93 条 1 項に基づく「土木工事等のための埋蔵文化財発掘の届出書」が、長野市教育委員会（以下、市教委）に令和 2 年 9 月 30 日付で提出された。当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地である松代城下町跡（F-033）に含まれており、市教委は埋蔵文化財の有無を確認するため試掘調査を実施する必要があると判断し、同年 10 月 13 日付 2 埋第 2-218 号「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について（通知）」の通知にて、「発掘調査（試掘調査）」を指示した。

試掘調査は、令和 2 年 9 月 30 日付の試掘調査依頼書に基づき、まず令和 3 年 2 月 4 日に既存建物の解体に合わせて第 1 試掘坑の調査を実施した。その結果、江戸時代に遡る遺物包含層を検出し、解体工事により破壊される範囲について予備的な発掘調査を実施することとした。予備調査は 2 月 9 日から 2 月 15 日に実施し、江戸時代から近代に至る 3 面の遺構面を確認し、土坑や地業遺構などの遺構を検出した。

以上の結果を踏まえ、開発工事に先立って記録保存のための発掘調査が必要であると判断し、令和 3 年 2 月 19 日に長野市埋蔵文化財センターと事業者が協議を行い、開発区域約 1,447m<sup>2</sup>のうち埋蔵文化財に影響のある 186m<sup>2</sup>以上を対象として発掘調査を実施することとした。また、上記協議後の 3 月 1 日に旧貯水槽撤去に伴い、第 2 試掘坑の調査を実施し、遺物包含層を確認している。

令和 3 年 3 月 3 日付で事業者より「発掘調査依頼書」および「土地所有者承諾書」の提出を受け、同年 4 月 1 日付で事業者との間に「埋蔵文化財の保護に関する協定書」および「埋蔵文化財発掘調査委託契約」を締結した。

現地での発掘調査は同年 4 月 1 日から 4 月 28 日までの 28 日間実施した。



第1図 発掘調査地点位置図

## 第2節 調査体制

本調査は長野信用金庫より委託を受け、長野市教育委員会の直営事業として、長野市埋蔵文化財センターが実施した。その組織は以下のとおりである。

調査主体者	長野市教育委員会	教 育 長	近藤 守（令和2年度） 丸山陽一（令和3年度～）
統括責任者	長野市教育委員会	教育次長	樋口圭一（～令和3年度） 藤澤勝彦（令和4年度）
統括管理者	長野市教育委員会文化財課	課 長	小柳仁彦（令和2年度） 前島 卓（令和3年度～）
調査責任者	長野市埋蔵文化財センター	所 長	大井久幸
調査担当者	"	課長補佐	飯島哲也 風間栄一（令和3年度～）
調査機関	長野市埋蔵文化財センター	庶務担当係 長	小林晴和（令和2年度）
		事務職員	宮本博夫、平林満美子
		調査担当係 長	風間栄一（令和2年度）
		主 事	小林和子、鹿田契之（令和4年度）
		研 究 員	井出靖夫（主任調査員）、田中暁穂（調査員） 小野涼香（調査員・令和2年度） 千野浩、清水竜太、森井ちひろ（～令和3年度）、 青木一男（令和4年度）、鈴木時夫（令和4年度）、 伊藤愛（令和2年度）、遠藤恵実子（令和2年度）
発掘調査員	向山純子		
発掘補助員	後藤大地		
発掘作業員	板倉君子、白田敬一、大日方英雄、徳嶽まゆ美、成澤廣志、 早川壮幸、三井邦夫、宮沢利忠、村井義博、山岸重子、山本文則		
整理調査員	青木善子、市川ちず子、鳥羽德子、半田純子		
整理作業員	飯島早苗、清水さゆり、西尾千枝、待井かおる、 宮島恵子、三好明子		
測量調査委託	株式会社写真測図研究所		
重機等現物提供	長野信用金庫（本体工事請負業者：北信土建株式会社）		

### 第3節 試掘調査の成果

開発予定地は近世城下町として知られる松代城下町跡に属し、近隣の調査状況からも遺構の残存が予想された。そのため既存建物の基礎解体に合わせて試掘調査を実施することとし、令和3年2月4日および3月1日に試掘調査を実施した。

2月4日に実施した第1試掘坑の調査は、既存建物地中梁の撤去に合わせて実施した。その結果、地中梁は現地表面から約150cmの深さまで建造されているものの、格子状に配置された地中梁に囲まれた建物直下に包含層が残存することを確認した。

た。包含層の確認レベルは現地表面から100cm程度の深さであり、黒灰色粘質土に近世の陶磁器片を包含していることを確認した。

3月1日に実施した第2試掘坑の調査は貯水槽撤去に伴って実施した。現地表面から25～60cmの深さで、焼土および炭化物を含む暗褐色粘質土層が確認され、さらに下層に陶磁器を含む砂礫層の堆積を確認した。砂礫層は第1試掘坑では確認できなかったため、敷地東側の土層堆積とは異なることを確認した。

第1試掘坑および第2試掘坑の調査によって、当該地には埋蔵文化財が残存していることが明らかとなった。また既存建物のない敷地西側部分については、発掘調査を行うこととした。

### 第4節 調査経過（調査日誌抄）

予備調査は、令和3年2月9日から2月15日に実施した。1区の調査を2月9日に開始し、重機で1次確認面、2次確認面、3次確認面と掘り下げた。各確認面で精査を行い写真を撮影した。3次確認面で土坑2基を検出し、2月10日に土坑2基の完掘、実測、写真撮影を行い1区の調査を終了した。2月15日に2区の調査を開始し、1区と同様に重機にて掘り下げたが、江戸時代以前に遡る明確な遺構の検出はされず、当日中に調査を終了した。

発掘調査は令和3年4月1日より開始し、以下の通りに調査を行い、4月28日に現地調査を終了した。

令和3年4月1日（木）重機による表土除去作業開始。

4月5日（月）発掘作業員雇用開始。壁面精査、遺構検出開始。

4月6日（火）1次確認面検出全景写真撮影。

4月7日（水）遺構掘り下げ開始。SX03で桶削板検出。

4月12日（月）SD01およびその周辺の遺構の実測作業開始。

4月16日（金）1次確認面空掘。遺構測量。SD03を検出。

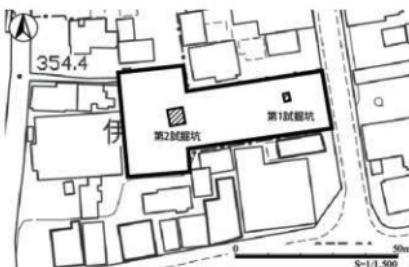
4月20日（火）SD03を除いて、重機で2次確認面まで掘削。検出作業を行う。

4月21日（水）2次確認面遺構掘削開始。SX09で木製遺物検出。

4月23日（金）SD03平面図実測。SX09調査中に木枠（SK03）を検出。

4月27日（火）全景写真撮影。調査区壁面および遺構測量。木簡出土。SK03完掘。

4月28日（水）平面図・断面図作成。調査機材を撤収し、現地作業終了。



第2図 試掘調査位置図

## 第2章 調査地周辺の環境

### 第1節 地理的環境

長野県の北部、千曲川と犀川が合流する長野盆地は、西の西部山地、東の河東山地に挟まれた南西から北東に約40kmの狭長な盆地である。長野盆地南部は西から流れ込む犀川によって扇状地が形成される。一方、南から流れ込む千曲川は土砂運搬量が大きい犀川の扇状地が発達した影響で、盆地南東部を河東山地に沿って緩やかに北流し、両岸に大きな自然堤防を形成する。河東山地は尾根が樹枝状に千曲川まで伸び、平地を分断しており、尾根と千曲川によって囲まれる湾状地形が連続する。湾状地形の奥部は崖錐性の堆積物の供給が多く急傾斜の扇状地が発達する。

松代城下町跡は、長野盆地の南東部、千曲川の右岸にあり、背後に母袋山、高遠山、奇妙山などの河東山地を控え、そこから流れ出る神田川、蛭川、藤沢川などによって形成された複合扇状地の扇端部と千曲川の自然堤防、氾濫原に立地する。

また松代城下町跡の南東に位置する皆神山は、標高659m、比高差250mの更新世中期の溶岩円頂丘であり、ここから産出する普通輝石紫蘇輝石安山岩は古墳時代以降のカマド石や近世松代城および城下町の石垣、建物礎石などとして人々に利用されている。

### 第2節 歴史的環境

長野盆地東部には、縄文時代を通して遺跡数は少ない。しかし、高速道路や新幹線開通の発掘調査によって、縄文時代の遺跡が沖積地の地下2~5m程度の深さで発見されるようになり、長野盆地の低地部に未発見の縄文時代集落が残されている可能性が高く、今後新たな遺跡が増加する可能性がある。松代町域では、旧石器時代終末期の局部磨製石斧を出土した宮ノ入遺跡(12)や縄文時代草創期の遺物を出土した村東山手遺跡(5)など、旧石器時代末から縄文時代初頭の遺物の散布が知られ、この時期の人々の活動の痕跡を僅かに確認することができる。縄文時代の集落遺跡として、松原遺跡(15)において前期中葉に金井山山麓斜面に堅穴住居が造られ始め、前中期から中期初頭になると自然堤防上に集落が造られることが知られるほか、村東山手遺跡では後期の散石住居や石棺墓が検出されているが、当地域においては、縄文時代から弥生時代中期前半まで、遺跡は散発的に確認されるのみである。

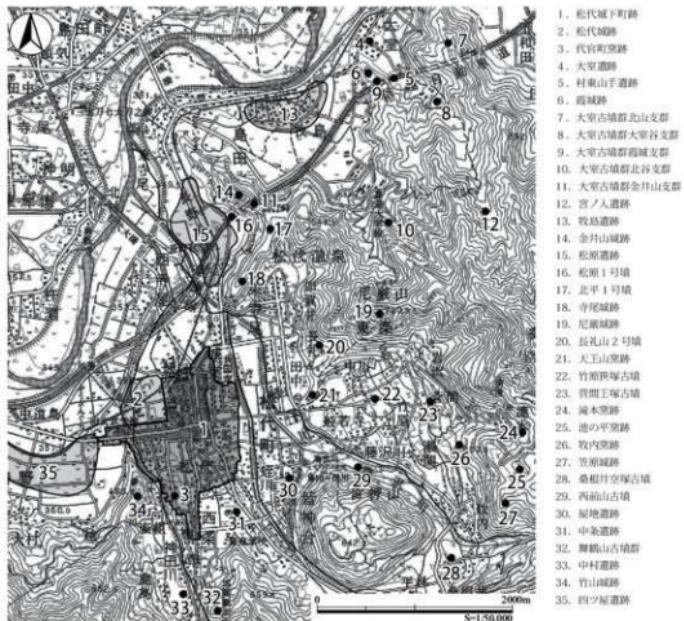
遺跡数が増加するのは弥生時代中期後半の栗林期以降である。松原遺跡では環濠を持つ拠点的な集落が形成される。長野盆地では桜田遺跡(長野市若穂綿内)、塙崎遺跡群(長野市篠ノ井)にも同時期の拠点的な集落が形成され、松原遺跡と桜田遺跡との間では、磨製石斧生産の分業体制がとられていた可能性が指摘されている。松原遺跡の集落は後期になると縮小し、屋地遺跡(30)、中村遺跡(33)、四ツ屋遺跡(35)、大室遺跡(4)などに分散する。四ツ屋遺跡では、住居跡から銅製円環、シカのト占骨が発見されており、当該期の祭祀形態の一端を垣間見ることができる。

弥生時代から古墳時代への移行期には、松原遺跡を見下ろす尼畿山の尾根上に北平1号墳(17)が構築される。削り出しと盛土によって造られる高さ約1.1mの低墳丘は、長軸11.5m、短軸9.5mの方形を呈し、組み合わせ式箱形木棺の主体部が2基確認されている。箱清水式文化圏の墓域は集落に接する周溝墓の集団墓が知られるが、北平1号墳は集落を見下ろす山上に単独で構築され、出土遺物に東海系の壺、甕が含まれることから、地域社会の転換期を示す遺構と位置づけられている。

古墳時代の松代地域は積石塚古墳や合掌形石室を特徴とする大室古墳群に代表されるように後期古墳の分布が濃密な地域である。大室古墳群（7～11）では5世紀中頃に合掌形石室を持つ古墳が築造され始め、その後、横穴式石室を内蔵する古墳が造られ、500基を超える群集墳を形成する。大室古墳群からは馬の飼育に関わったことを示すような土馬や馬頭が出土し、時期は下るが『延喜式』に「大室牧」が記されることもあり、大室古墳群を築造した集団と馬匹生産の関連が推測されている。

藤沢川、蛭川、神田川の3河川流域の古墳の様相については、湮滅した古墳も多く不明な部分が多いものの、古墳の築造は中期に始まるにされ、舞鶴山古墳群（32）では5世紀前半の舞鶴山1号墳、5世紀後半から6世紀初頭の舞鶴山2号墳、さらに長礼山2号墳（20）が山頂部あるいは尾根上に築造される。後期になると蛭川の氾濫原や内奥に古墳群が形成されるようになり、県下最大級の積石塚古墳である菅間王塚古墳（23）、横穴式石室系の合掌形石室をもつ桑根井空塚古墳（28）や竹原笹塚古墳（22）が現存する。また金井山の西側山麓斜面には7世紀後半に構築された松原古墳群が存在しており、横穴式石室をもつ円墳と考えられる松原1号墳（16）からは7体の追葬、副葬品として直刀、馬具、耳環、勾玉のほか、1,000点を超えるガラス玉が発見された。後期以降の古墳には桑根井空塚古墳のように横穴式石室系の合掌形石室をもつ一群と松原古墳群にみられるように定型化した両袖式の横穴式石室をもつ一群の二系統がみられるようになる。二系統の石室の存在が、時期差であるのか、集団の差であるのか判断し得る材料はないが、当該期の地域的な特性を示しているものといえる。

以上のような古墳を構築した集団の痕跡は松代地域には多くはないが、古墳時代前期の遺物が中条遺跡（31）、四ツ屋遺跡で確認されており、四ツ屋遺跡では円筒埴輪と初期須恵器が発見されている。



第3図 周辺の主な遺跡

律令制下の長野市域は更級、埴科、水内、高井郡の4郡にまたがり、松代地区は埴科郡英多郷に比定されている。松代地区的古代の集落遺跡として、松原遺跡、屋地遺跡、中条遺跡、四ツ屋遺跡、村東山手遺跡、大室遺跡がある。また尼戸山や奇妙山の山麓斜面に天王山窯跡（21）、滝本窯跡（24）、池の平窯跡（25）、牧内窯跡（26）があり松代古窯跡群と捉えられている。四ツ屋遺跡では「松井」と刻書された須恵器が出土し、一帯が英多郷松井に含まれることが推定されているほか、基壇状の整地層の上に礎石建物が検出され、平安初期の創建ともいわれる道島廃寺との関連が推定されている。また松原遺跡では400軒以上の堅穴住居跡が検出され、出土遺物には鉄製鍵、磬、梵鐘、扇金具の鋳型、杏葉櫛、卜骨などが含まれ、一般村落とは異なる性格をもつと推測される。

中世の松代地域に関する考古学的資料は少ないが、文献史料上では古代末期に成立した「英多荘」が庄园領主を替えながら室町時代の初期まで存続することが知られる。中世前半の遺構は松原遺跡で井戸跡、溝跡、土坑などが検出され、このほかに屋地遺跡や四ツ屋遺跡で遺物の出土が知られる程度である。

中世後半になると戦国時代初期に文献史料上に寺尾氏・東条氏・西条氏・清野氏の名前が登場し、松代地域の支配に関わると考えられる。この時期の遺構としては、松原遺跡の金井山山麓斜面に14世紀から17世紀と考えられる五輪塔を伴う火葬墓群が形成されるほか、16世紀前半の瀬戸・美濃系陶器やかわらけ、内耳鍋などが大量に廃棄された溝跡が検出されている。蛭川流域に尼戸城（19）、笠原城（27）、竹山城（34）、閑谷城（松代町豊栄）など山城が知られている。特に尼戸城は1553（天文22）年に武田信玄が真田幸隆らに攻め落とさせたのち、北信濃侵略の拠点となった。

江戸時代以降、城下町として発展する現在の松代中心部は、中世以前の遺跡分布が希薄な扇状地扇端部から千曲川の自然堤防、氾濫原に立地しており、居住域として開発されたのは自然堤防上に海津城が造営されてからとされている。1560（永禄3）年までに武田信玄が築城した海津城は、梯郭式と呼ばれる縄張りを基本とし、千曲川を背にした本丸とその周囲を二の丸とし、それぞれを内堀、外堀で囲んだ範囲が築城当初の部分と推定されている。江戸時代になり二の丸大手口の出郭や三の丸、花の丸などが増設され、郭は土塁と堀によって囲まれることを基本とするが、本丸にのみ野面積みを基調とする高石垣が築かれる。

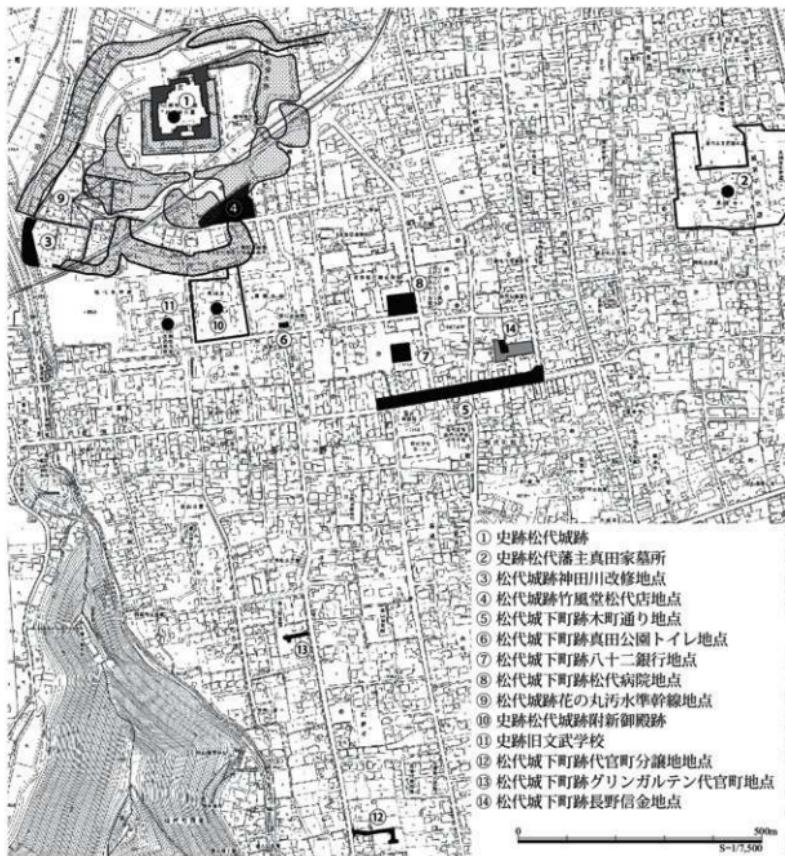
1622（元和8）年に上田城主真田信之が松代へ移封された頃には、城下町に惣構の土塁が巡らされるなど整備が進んでいたと考えられる。信越両国を結ぶ北国街道が通り交通の要所ともなった松代城下町は、城の周囲に上級藩士の屋敷地（殿町・片羽町・辰町）、その南に中下級藩士の屋敷地（柴町・御安町・田町・松山町・袋町・十人町・馬場町・代官町・清州町）が配され、北国街道に沿っては、町八町と呼ばれた町人町（馬喰町・紙屋町・組屋町・伊勢町・中町・荒神町・鍛冶町・肴町）が形成された。さらに人口の増加に伴って町外町が造られている。近世を通じて発展した松代城下町は、一方で水害と火災を繰り返しており、最大の水害となった1742（寛保2）年の戊の溝水では、城内が浸水したことをきっかけに、千曲川の流路を変える瀬直し事業が1747（延享4）年に着手された。

松代城跡の発掘調査は、1981（昭和56）年に松代城跡が国史跡に指定されたことから始まる（第4図）。松代城の整備復元のための発掘調査は、1983（昭和58）年から断続的に行われている。同じく国史跡に指定されている新御殿跡（⑩）でも整備に伴う調査が行われ、神田川放水路掘削では城郭の外堀の調査（③）、城郭南西に位置する花の丸の調査（⑨）なども行われている。

松代城下町跡の調査は2001（平成13）年に行われた木町通り地点（⑤）の調査から始まり、江戸時代を通じて繰り返された洪水や火災の痕跡が、地表から地下約160cmの間に良好に残されていることが明らかになり、江戸時代前半から明治時代にかけての街道沿いの建物や水道施設、火災痕跡などが検出された。また北国街道に面した屋敷の門の近くから江戸時代初めの幼児を埋葬した早桶が発見されており、筒守が副葬された状況から上

流階級の幼児が屋敷墓に葬られたと推定されている。

上級武家地であった殿町では八十二銀行地点(⑦)、松代病院地点(⑧)の調査が行われ、江戸時代後期の蔵などの建物跡や泉水路が検出されている。また代官町の松代藩士佐藤家の屋敷地の調査(⑬)では、天明8(1788)年の河内屋火事で被災した建物跡が検出されたほか、1751(宝曆元)年の暦が書かれた磨茶碗が出土している。今回の長野信金地点(⑭)は、片羽町および伊勢町に位置し、江戸時代後期から明治時代を中心とする水道関連遺構が検出されたほか、木簡などが発見された。この他、江戸時代後期に松代藩の殖産興業政策の一環として生産が始まった松代焼の窯跡の一つ、代官町窯跡(⑫)の発掘調査が行われており、調査によって素焼窯と登窯が検出されたほか、窯道具が出土し、松代焼の生産技術について新たな知見を得ることが出来ている。



第4図 周辺の調査地点位置図

## 第3章 予備調査の成果

### 第1節 調査の方法

試掘調査第1試掘坑の調査結果から、建物の解体工事によって既存建物地中梁に囲まれた範囲に残されている遺構面が破壊されることが想定された。そのため、解体建物範囲約355m<sup>2</sup>のうち、地中梁の間隔が広い2区画約77m<sup>2</sup>以上を予備調査区として設定し、地中梁によって分割された東側を1区、西側を2区とした。なお作業の安全を考慮し掘削を行ったため、実質的な調査面積は56m<sup>2</sup>である。

調査は、まず1区を重機により掘削し、土質の変化がみられる面で人力による精査を行い、遺構の確認を行った。掘削中に出土した遺物は、掘削段階ごとに一括して取り上げた。3次確認面で検出した1号遺構および2号遺構は実測し、遺構調査中に出土した遺物は一括して取り上げた。掘削面の標高は、任意のベンチマークを設定し計測し、後の本発掘調査の際にベンチマークの絶対標高を計測した。なお写真記録は一眼レフデジタルカメラを使用した。

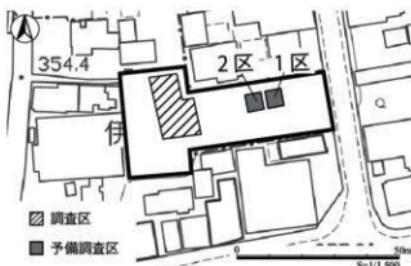
### 第2節 層序

1次確認面とした焼土を含む黒褐色粘質土層（第1層）以下、黒褐色粘質土層（第2層）、青灰色粘質土層（第3層）、黒褐色腐植土層（第4層）、青灰色粘質土層（第5層）、第5層より下は2区でのみ調査し、青灰色砂層（第6層）、青灰色粘質土層（第7層）の堆積を確認した。

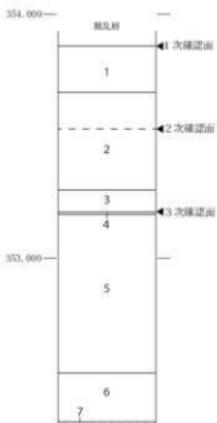
### 第3節 発見された遺構と遺物

1次確認面は既存建物の掘乱直下の層であり、焼土の広がりなどを確認したもののみ明瞭な遺構は確認されなかった。出土遺物は近代以降の陶磁器などである。

2次確認面は土層断面では明瞭に分層は出来なかったものの、遺構が検出される可能性を考慮して精査を行った。2次確認面においては明確な遺構は確認できなかったが、2区において確認面直上で丸太材による地業遺構を検出した。地業遺構は直径約10cm、長さ約110cmの丸太材を東西



第5図 調査区設定図



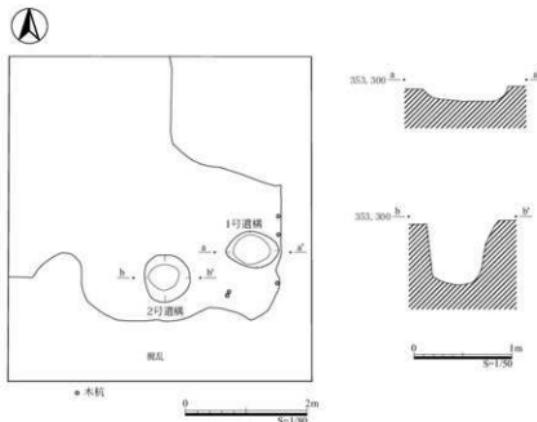
1. 黒褐色粘質土、焼土含む、1次確認面。
2. 黒褐色粘質土、炭化物少量、褐色粘土ブロック少額、地中梁含む。
3. 青灰色粘質土、礫少量含む。
4. 黒褐色腐植土、3次確認面。
5. 青灰色粘質土、粘性強、腐植物少、澗水有り。
6. 青灰色。
7. 青灰色粘質土。

第6図 予備調査区土層柱状図

方向に連続させて2列並行に並べ、さらにその下に直行させた丸太材を1m程度の間隔で並べている。建物の基礎構造と考えられる。出土遺物から2次確認面は江戸時代後期に遡る包含層に含まれると推測される。

3次確認面は1区で柱基礎構造と考えられる集石1基（1号遺構）と土坑1基（2号遺構）を検出した。1号遺構は径5~10cm程度の礫を多量に含み、長軸81cm、短軸58cmの梢円形を呈し、深さ16cmを測る。遺構内から出土した遺物は、1が瀬戸・美濃系の輪禿皿で見込に蛇の目状に凸帯を作り露胎である。2は肥前系磁器のミニチュア急須であり、上絵付けで草花文が施される。3は真鍮製の煙管雁首である。火皿は大きく、穿孔がある。比較的長い脂返しと、肩をもつことなど古手の特徴があることから17世紀代に遡る可能性がある。2号遺構は直径80cmの平面円形で深さ50cmを測る。埋土には礫や板材が含まれ、検出面には樹皮等の植物遺体の集積がみられた。遺構内から出土した4・5は肥前系の磁器碗である。

2区においては3次確認面以下の土層確認を行った。その結果、第6・7層において遺構を検出することは出来ず、また遺物を確認することもできなかったことから、下層に遺物包含層は存在しないものと判断した。



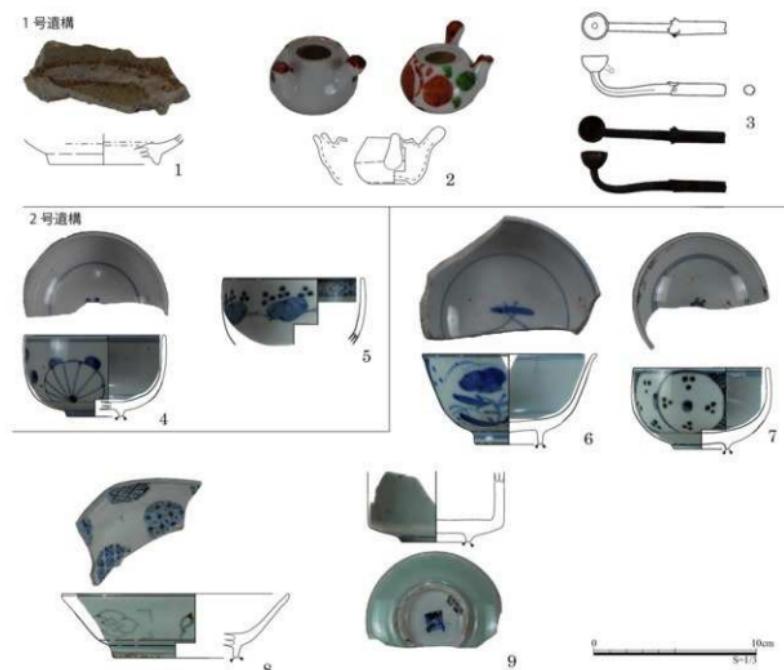
第7図 予備調査1区3次確認面実測図



写真1 予備調査1区3次確認面全景（北西から）



写真2 予備調査1区1号遺構検出（南から）



第8図 予備調査出土遺物実測図

第1表 予備調査出土遺物観察表

図番号	種類	器種	出土位置	法量(cm)			釉薬	胎土色	絵付/文様/特徴など	備考
				口径	底径	器高				
8-1	陶器	皿	1号造構	—	6.6	(1.9)	灰釉	灰白色	見込蛇の目輪剥ぎ、高台周辺露胎	瀬戸・美濃系
8-2	磁器	急須	1号造構	2.8	2.7	3.55	透明	白色	上輪付け/草花文/横手形	肥前系/ミニチュア
8-4	磁器	碗	2号造構	8.6	3.3	5.5	透明	灰白色	染付/外側:菊花文、内側:團線、五弁花文/扱付輪剥ぎ	1780～1860
8-5	磁器	碗	2号造構	8.6	—	(4.1)	透明	灰白色	染付/外側:コンニャク印判桐文、内側:四方尊文/	肥前系/1780～1860
8-6	磁器	碗	1～2層	10.4	4.0	5.6	透明	灰白色	染付/外側:草花文・内側:團線、見込:文様/	肥前系/1820～1860
8-7	磁器	碗	1～2層	8.4	3.4	5.5	透明	灰白色	染付/外側:格子文・鼓文、内側:團線、見込:コンニャク印判/扱付輪剥ぎ	肥前系/1690～1780
8-8	磁器	皿	1～2層	13.8	7.6	4.0	透明	灰白色	染付/外側:文様、内側:丸文/扱付輪剥ぎ	肥前系/八角小皿
8-9	磁器	碗	2～3層	—	4.2	(4.4)	透明	灰白色	染付/外底面:二重角路、見込:コンニャク印判五弁花文・團線/扱付輪剥ぎ、軸に気泡含む	肥前系/1780～1860

図番号	材質	器種	出土位置	全体長(cm)	火皿径(cm)	火皿高さ(cm)	備考
8-3	真鍮	煙管	1号造構	8.6	1.6	1.0	雁首ノ刷あり、袖強帯なし。火皿穿孔あり

## 第4章 調査の成果

### 第1節 調査の方法

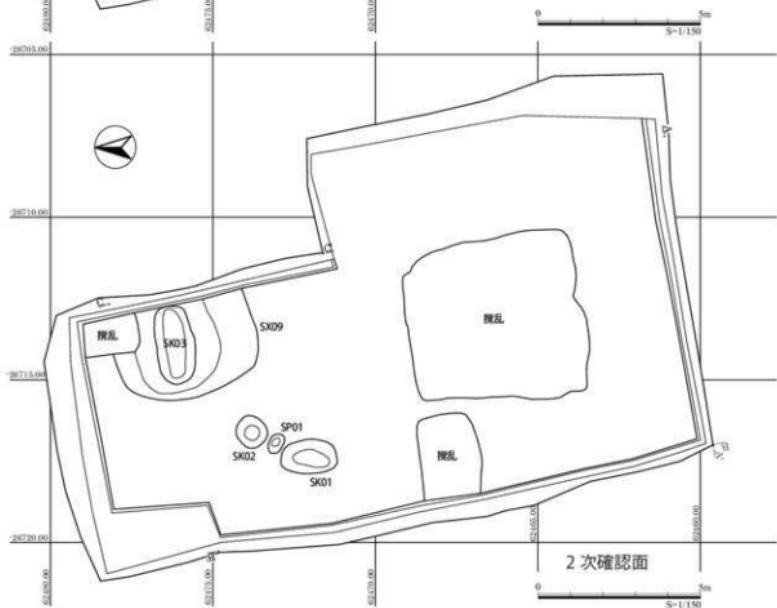
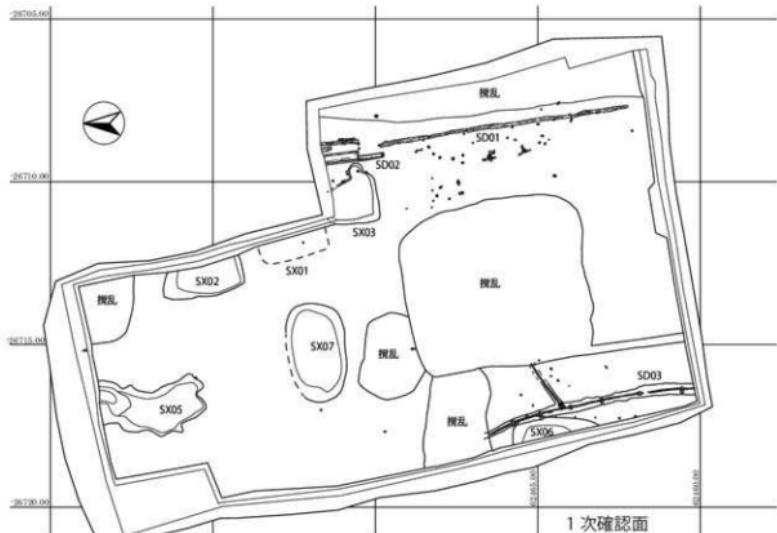
試掘調査および予備調査の成果により、当該地に近世に遡る遺構が残存することが明らかとなったため、解体建物の影響を受けない敷地西側の186m<sup>2</sup>以上を対象として発掘調査を行うこととした。実質調査面積は214m<sup>2</sup>である。調査は1次確認面まで重機で掘削し、その後、人力による遺構検出および完掘を行い、適宜写真撮影をおこなった。遺物は包含層の掘り下げ段階ごと、および各遺構ごとに一括して取り上げた。1次確認面の調査終了後、重機により2次確認面まで掘削し、1次確認面と同様の手順で調査を行った。遺構および調査区壁面のセクションの実測は、主にトータルステーションによる測量を行い、現地で作図作業を行った。なお写真記録は一眼レフデジタルカメラ、35mmのカラーリバーサルフィルムおよび白黒フィルムを使用した。

### 第2節 層序

調査地点は、駐車スペースとして利用されていた場所で、アスファルト舗装および砕石の表土が残る(第10・11図)。以下、調査区南壁および西壁の分層から基本的な堆積を記す。表土直下は、現代遺物を含む黒褐色粘質土(第1層)が堆積し、その直下に焼土を多量に含む層(第3層)の堆積がみられる。この焼土を多量に含む層からは瓦など近代遺物が出土し、明治時代以降の火事場整理に伴う層と考えられ、SX01～03はこの時期の廃棄土坑と推測される。調査区南側では焼土層の下に褐灰色粘質土層を挟んで礫層(第6層)が堆積する。礫層の下層に10～20cmの厚さで粘質土層(第14～19層)が堆積し、最下層は砂礫層(第20層)となる。全体的に南から北に向けて傾斜する堆積を示している。

第2表 検出遺構一覧表

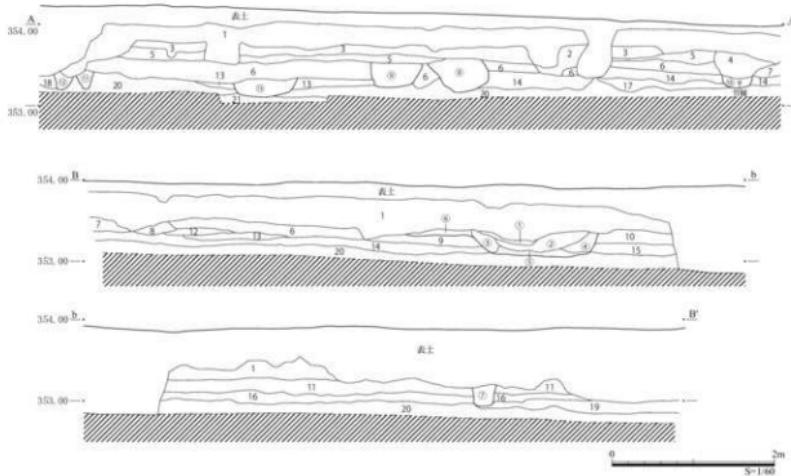
遺構名	検出面	平面形	規模(cm)			備考
			長軸	短軸	深さ	
S X 0 1	0次面	方形	210	90	35	火事場整理遺構
S X 0 2	0次面	方形	335	140	50	火事場整理遺構
S X 0 3	0次面	略方形	155	135	20	火事場整理遺構
S X 0 4	欠番					
S X 0 5	1次面	不整形	340	150	10	土間状遺構
S X 0 6	0次面	—	220	105	30	植物遺体含む
S X 0 7	1次面	楕円形	305	180	10	
S X 0 8	欠番					
S X 0 9	2次面	不整形	440	316	30	池状遺構
S D 0 1	0次面	溝状	950	—	—	石組溝地業
S D 0 2	0次面	溝状	185	35	—	組合せ木樋
S D 0 3 a	1次面	溝状	645	30	12	竹樋
S D 0 3 b	1次面	溝状	160	15	—	竹樋
S K 0 1	2次面	楕円形	170	105	10	埋土は黒褐色粘質土
S K 0 2	2次面	円形	100	100	5	埋土は黒色泥炭
S K 0 3	2次面	楕円形	240	120	35	木組立坑。植物遺体多量含む。木簡2点検出。
S P 0 1	2次面	円形	60	40	5	埋土は黒色泥炭。SK02と同一遺構の底面か
S P 0 2	0次面	—	30	—	25	調査区壁面で検出
S P 0 3	0次面	—	65	—	40	調査区壁面で検出
S P 0 4	0次面	—	62	—	30	調査区壁面で検出
S P 0 5	1次面	—	21	—	23	調査区壁面で検出
S P 0 6	1次面	—	25	—	21	調査区壁面で検出
S P 0 7	1次面	—	76	—	21	調査区壁面で検出



### 第9図 調査区全体図

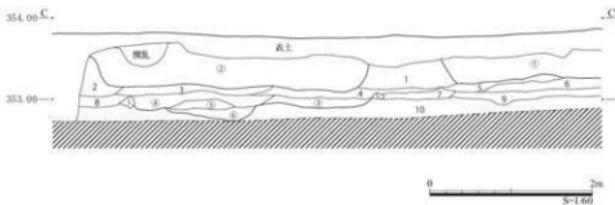
なお発掘調査時に、1次確認面として精査した面は、調査区南側でSD01・02の遺構底面となる第6層疊層上面であるが、調査区北側においては第6層疊層の直下の第14～16層の粘質土層の上面であり、1次確認面とした検出層に南北で差異が生じてしまっている。次に2次確認面として設定したのは第19・20層上面である。また、整理作業段階で表土直下から掘り込まれるSD01・02等の遺構については0次面の遺構と設定した。

よって、以下の記述においては、やや煩雑になるが発掘調査段階の検出作業面を示す場合1次確認面、2次確認面と表記し、整理段階で設定した遺構面は0次面、1次面、2次面と表記する。遺構面の設定は0次面が1層直下、1次面が第13～16層上面、2次面が第19・20層上面である。



1. 7SYR3/2 黒褐色粘質土。しまり有り。認入物：焼土少量、陶文化少量、内部少量。  
ビニール片など現代遺物。
2. 7SYR3/1 黒褐色粘質土。しまり有り。認入物：炭化物微量。径 3cm 内縫隙。
3. 10YR3/2 黒褐色粘質土。しまり有り。認入物：焼土多量、炭化物中量。  
径 3cm 以下褐色粘土ブロック少量。径 5cm 大理石類。
4. 10YR3/1 黒褐色粘質土。しまり有り。認入物：径 2～8cm 内縫隙-内部多量。遺構底面付近。
5. 10YR4/1 黒褐色粘質土。しまり有り。認入物：炭化物微量。径 3～5cm 内縫隙。
6. 10YR4/1 和田原粘質土。しまり有り。認入物：径 2～10cm 内縫隙-内部多量、隙地砂少。  
隙地砂少。
7. 10YR3/2 黒褐色粘質土。しまり有り。認入物：炭化物微量。径 2～5cm 内縫隙-内部微量。
8. 10YR4/1 黒褐色粘質土。しまり有り。認入物：径 3～10cm 内縫隙-内部中量。  
陶文化少量。
9. 2SYR3/1 黒褐色粘質土。しまり有り。認入物：径 1～5cm 内縫隙-内部中量。
10. 10YR4/1 黑褐色粘質土。しまり有り。認入物：炭化物少量。  
径 3～8cm 内縫隙-内部少量。径 3cm 以下褐色粘土ブロック少量。
11. 2SYR3/1 黑褐色粘質土。しまり有り。認入物：炭化物少量。径 2～5cm 内縫隙少量。  
径 1cm 以下褐色粘土ブロック少量。
12. 10YR7/6 明黄色粘質土。しまり(無)。認入物：黒褐色粘土少量、腐殖少。
13. 10YR4/2 黄褐色粘質土。しまり有り。認入物：径 3～10cm 内縫隙-内部多量。
14. 10YR4/1 和田原粘質土。しまり有り。認入物：径 2～10cm 内縫隙-内部少量。
15. 10YR2/1 黑褐色粘質土。しまり有り。認入物：径 3～10cm 内縫隙少量。
16. 5BC4/1 青灰褐色粘土。しまり有り。認入物：径 2cm 以下小石少量。
17. 10YR4/1 和田原粘質土。しまり有り。認入物：径 2～5cm 内縫隙-内部少量。
18. 10YR3/2 黑褐色粘質土。しまり有り。認入物：径 3～15cm 内縫隙-内部中量。
19. 5CY4/1 黃褐色粘質土。しまり有り。認入物：径 2cm 以下小石少量。
20. 10YR2/2 黑褐色粘質土。しまり有り。認入物：径 5～15cm 内縫隙-内部中量。
21. 5BC4/1 喬青灰色粘質土。しまり有り。認入物：径 5～15cm 内縫隙。

第10図 調査区セクション図(1)



1. 10YB4/1 黒褐色粘質土。しまり有り、混入物：径3～10cm円礫・角礫中量、褐色粘土板塊。
  2. 10YB3/1 黒褐色粘質土。しまり有り、混入物：炭化物微量。
  3. 10YB3/2 黒褐色粘質土。しまり有り、混入物：炭化物微量。径2cm以下小石微量、黒褐色粘土板塊。
  4. 10YB4/1 黒褐色粘質土。しまり有り、混入物：2～10cm円礫・角礫少量。
  5. 2.5Y4/2 暗褐色粘質土。しまり有り、混入物：2～10cm円礫・角礫中量、径1cm以下褐色粘土ブロック微量。
  6. 2.5Y5/1 黄褐色粘質土。しまり有り、混入物：径2～10cm円礫・角礫中量、保水性無し。
  7. 7.5Y3/1 オリーブ緑色粘質土。しまり有り、混入物：径3～15cm円礫多量。
  8. 7.5Y3/1 オリーブ緑色粘質土。しまり有り、混入物：径2～5cm円礫少量、黒褐色粘土板塊。
  9. 7.5Y3/1 オリーブ緑色粘質土。しまり有り、混入物：径2～5cm円礫少量、褐色粘土板塊。
  10. N4/0 黄褐色粘質土。しまり有り、混入物：径2～10cm円礫・角礫多量。
- S001  
①. 10YB3/1 黒褐色粘質土。しまりやや弱い、混入物：堆土多量、炭化物中量、5～15cm円礫・角礫少量、炭化物少量。
- S002  
②. 10YB3/2 黒褐色粘質土。しまりやや中弱い、混入物：堆土多量、炭化物少量、径5～10cm円礫・角礫微量、瓦片多量。
- S009  
③. 10YB3/1 オリーブ緑色粘質土。しまり有り、押すと凹む、混入物：炭化物微量、径2～5cm円礫・角礫少量、黒褐色粘土板塊。
- ④. 10YB3/1 黒褐色粘質土。しまり有り、押すと凹む、混入物：炭化物微量、径2～5cm円礫・角礫中量。
- ⑤. SY2/1 オリーブ緑色粘質土。しまり有り、混入物：炭化物微量、径2～8cm円礫中量。
- ⑥. SY2/2 オリーブ緑色粘質土。しまり有り、混入物：径5～20cm円礫・角礫多量。

第11図 調査区セクション図（2）



写真3 調査区南壁断面



写真4 調査区東壁断面

### 第3節 発見された遺構と遺物

今回の調査で検出された遺構は、セギなど用水に関連する遺構3基(SD01～03)、火事場整理遺構3基(SX01～03)、池状遺構1基(SX09)、土坑1基(SK03)、性格不明遺構5基(SX05～07、SK01・02)、小穴7基(SP01～07)である。また調査区から近世以降の遺物が検出された。しかしながら、調査地において江戸時代後期以降の整地が繰り返されたことと、地下水位が高い地形の特徴から、遺構の検出が困難であり、さらに検出面からの掘り込みが数センチメートルと浅い遺構がほとんどであったことから、明確に遺構の埋土に伴う遺物は火事場整理遺構から出土したものほか、SK03から出土した遺物に限られる。よって、上記の遺構を除いては、以下の記述において各遺構内からの出土遺物としたものの中に、本来は包含層に含まれるべきものが混入している可能性がある。

以下に前項で示した遺構面ごとに遺構の概要を記す。

#### 0次面の遺構

0次面としていた遺構の掘り込み面は表土直下となり、出土する遺物等から幕末以降の構築で近代に廃棄された遺構と考えられる。

##### 【用水関連遺構】

調査区東部で南北方向に延びる石組溝の胴木および組合せ木樋を検出した。敷地境を流れるセギの遺構である。

##### SD01(石組溝、第12・14図)

南北方向に繋がる胴木を検出した。石組溝の基礎と推定されるが対になる胴木は検出されていない。周間に木杭が多数検出されている。検出した規模は長さ9.5mである。北端は胴木が3本並列しており、数次の造り替えがあったと考えられる。出土遺物は、数次の造り替えがあったことに加え、SD02が切り合うこと、また検出がほぼ遺構底面であることから、本遺構に伴うことが明らかな遺物は少ない。SD01の遺物として取り上げた中にSD02や近接する搅乱層などの遺物が混入していることは否定できない。1～3は肥前系磁器である。1は発色の悪い染付で矢羽文が手描きで施される小形碗、2は低い高台を持つ碗で見込に手描きで粗雑な五弁花纹が施される。4は瀬戸・美濃系陶器の碗で高台は露胎、釉は貫入目立つ。5は京・信楽系の所謂小杉碗であり、若杉文が呉須と鉄絵で描かれる。6・7は肥前系磁器の皿で蛇の目凹形高台、7は見込に手描きで唐草文を描く。8は瀬戸・美濃系陶器の所謂石皿である。豊付に焼成時の砂粒が付着する。9は肥前系磁器の瓶で外面に蛸唐草文が描かれる。10は瀬戸・美濃系陶器の仏花瓶で、口縁部から頸部を欠く。底面は無釉で回転糸切り痕を残す。胴木直下から出土している(写真図版3-1)。

##### SD02(組合せ木樋、第12図)

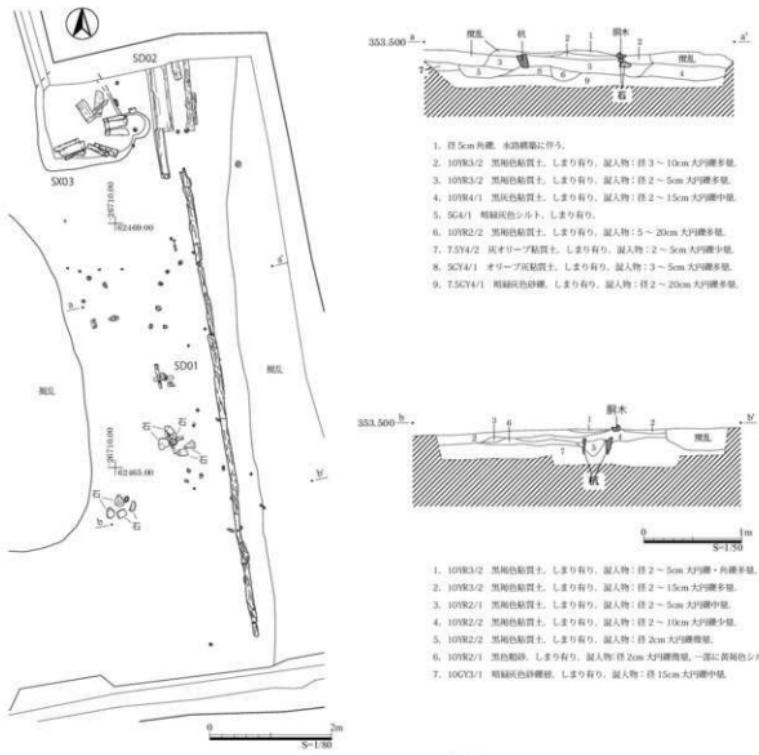
組合せ木樋でSD01に並行し、SD01よりも新しい。底板と側板の一部を検出し、検出規模は長さ1.85m、幅0.35mである。底板の直上から大正11年十銭硬貨が出土している。

##### 【火事場整理遺構】

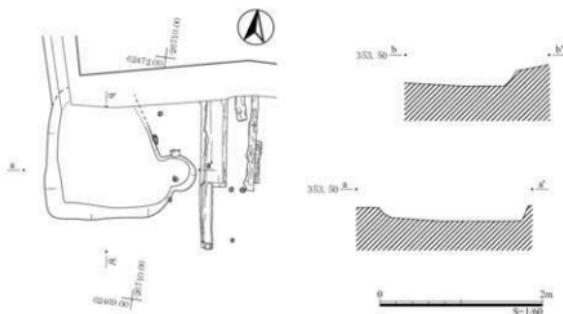
3基の遺構は調査区東北部に集中し、埋土に多量の焼土を含むほか、瓦・陶磁器などの近代遺物を含む。

##### SX01(第9・15図)

検出は遺構の底面のみである。調査区外に広がるため平面形は不明である。調査区壁のセクションの観察からSX03と同時期に埋められていると判断される。1は肥前系磁器輪花碗で、二次的な被熱があり、同一個体の可能性がある口縁部片が体部外面に溶着する。



第12図 SD01・02 実測図



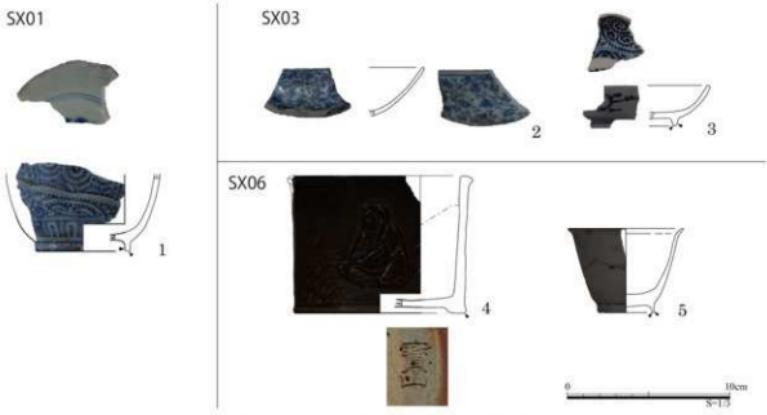
第13図 SX03 実測図



第14図 SD01出土遺物実測図

第3表 SD01出土遺物観察表

図番号	種類	器種	法量(cm)			釉薬	胎土色	絵付/文様/特徴など	備考
			口径	底径	器高				
14-1	磁器	碗	8.7	—	4.2	透明	灰白色	染付/外側:矢羽文、内側:二重 團線/	肥前系
14-2	磁器	碗	—	3.6	(2.0)	透明	灰白色	染付/外側:團線・草花文か、内 側:團線・五并花文/費付輪剥ぎ	肥前系/ 1780~1860
14-3	磁器	碗	6.7	—	(5.2)	透明	灰白色	染付/外側:花文・俵文か、内 側:二重團線/	肥前系/19世紀代
14-4	陶器	碗	—	5.4	(3.0)	灰釉	灰色	—/-/釉貫入	瀬戸・美濃系
14-5	陶器	碗	—	3.4	(2.9)	透明	灰白色	乳頭・鉄輪/若杉文/高台脇から 底部剥離、釉貫入	京・美濃系/小杉碗/ 18世紀末~
14-6	磁器	皿	—	8.4	(1.4)	透明	灰白色	染付/外側:團線、内側:風景/ 蛇の目四形高台	肥前系/ 1780~1860
14-7	磁器	皿	12.6	8.2	2.2	透明	灰白色	染付/外側:團線、内側:唐草文 /蛇の目四形高台	肥前系/18世紀後半
14-8	陶器	皿	20.4	8.8	2.8	透明	灰白色	染付/内側:文様/費付輪剥ぎ	瀬戸・美濃系/石皿
14-9	磁器	瓶	1.8	—	(9.3)	透明	灰白色	染付/唐草文/内側面施釉	肥前系
14-10	陶器	仏花瓶	—	6.7	(9.2)	铁釉	白色	—/-/回転系切り、底部剥離	瀬戸・美濃系



第15図 SX01・03・06出土遺物実測図

第4表 SX01・03・06出土遺物観察表

図番号	種類	器種	出土遺構	法量(cm)			釉薬	胎土	絵付 / 文様 / 特徴など	備考
				口径	底径	器高				
15-1	磁器	碗	SX01	—	5.6	(4.8)	透明	白色	染付 / 外面：蛸唐草・蓮弁文・團線・列点、外底：團線。見込：團線・草花文か / 深付輪剥ぎ	肥前系 / 1690
15-2	磁器	輪花皿	SX03	—	—	—	透明	白色	染付 / 内外面：唐草文 / 背付輪剥ぎ	口縁輪剥ぎあり
15-3	磁器	輪花皿	SX03	—	—	—	透明	白色	染付 / 外面：唐草文・團線、内面：唐草文 / 背付輪剥ぎ	肥前系
15-4	陶器	火入れ	SX06	10.4	10.4	8.5	鉄釉	淡灰黄色	陽刻 / 人物 / 外底面刻印「寶山」	京焼
15-5	磁器	小杯	SX06	7.0	3.3	5.2	透明	白色	— / — / 背付輪剥ぎ	肥前系

#### SX02 (第9図)

検出は遺構底面のみである。調査区外に広がるため平面形は不明であるが、検出範囲で長軸 3.35m を測る。

#### SX03 (第13・15図)

遺構の平面形は方形部(東西 1.55m、南北 1.35m)の東辺に直径 45cm の半円形部が接続している。埋土は SX01・02 と同様の焼土であったため、一つの遺構として調査を行ったが、先行して構築された半円部を破壊して方形部が造られた可能性がある。底面から桶の側板が出土しており、その周囲に炭化物層が薄く堆積していた。SD01・02 に近接することおよび桶の出土から、用水と関連する遺構が火灾場整理の際に利用された可能性も考えられる。2・3 は肥前系磁器輪花皿で、2 は細い線描きで唐草文が表現される。二次的な被熱がある。

#### 【性格不明遺構】

#### SX06 (第9・15図)

第1層の直下から掘り込まれており、検出レベルから第6層疊層よりも上層から掘り込まれている。埋土は軟弱で樹皮などの木質を含む。4 は京焼の火入れで、外面に人物が陽刻される。底面に「寶山」の刻印が施される。

#### 【小穴】

検出した小穴(SP02～SP04)は、いずれも調査区壁面で検出した(第10図)。掘り込み面は攪乱されており、構築時期は不明である。

## 1次面の遺構

調査区北側の1次確認面であり、調査区南側は第6層礫層を掘削後の調査面である。検出遺構はSD03、SX05・07、SP05～07である。

### 【用水関連遺構】

#### SD03（竹樋、第16・17図）

1次確認面の全景写真を撮影後、調査区内に散在する杭の検出を行うために掘り下げている途中で竹と木柱の継手（継手2）を検出したため、周辺を掘り下げる結果、南北に延びるSD03aと北東に延びるSD03bを検出した。平面的に掘り方を検出することはできなかったが、第6層礫層より下位に位置し、検出状況および調査区壁面の観察から調査区南壁第14層および西壁第12層を切って構築されていることを確認した。

SD03aは長さ90～130cm程度の節を抜いた竹を管とし、木製の継手で接続している。検出範囲で継手は6個検出し、西に緩く弧を描いて南北に延びる。SD03aの北端は搅乱によって切られており、搅乱の先で続きを確認することはできなかった。なお搅乱の内部には人頭大の石や木材が散乱していることから、この搅乱の位置に当初、石積みの池状遺構が存在した可能性があり、その場合、竹樋の水の供給先となっていた可能性も考えられる。

6個検出された継手は、丸太を軸目取りし、周囲を削って調整している。1～5は、面取りするものの丸みを残す。6は角柱状に仕上げる。継手には孔がある基準となる墨打ち線や番付が墨書きされている。4は「十八」の墨書きがあり、2・5にも番付と思われる不明な文字が墨書きされる。

SD03aの調査中に継手4と継手5の間で北東方向に延びる竹樋（SD03b）を検出した。調査の結果、両者は接続しておらず（写真4～3）、SD03bはSD03aに先行する竹樋の残欠と推測される。また検出時には両者の交点上に板が置かれており、SD03a構築時に意図的に交点を塞ぐように置いたと推測される。SD03bに継手は確認されず、竹の長さは160cmを超えていた。

### 【性格不明遺構】

#### SX05（第18・20図）

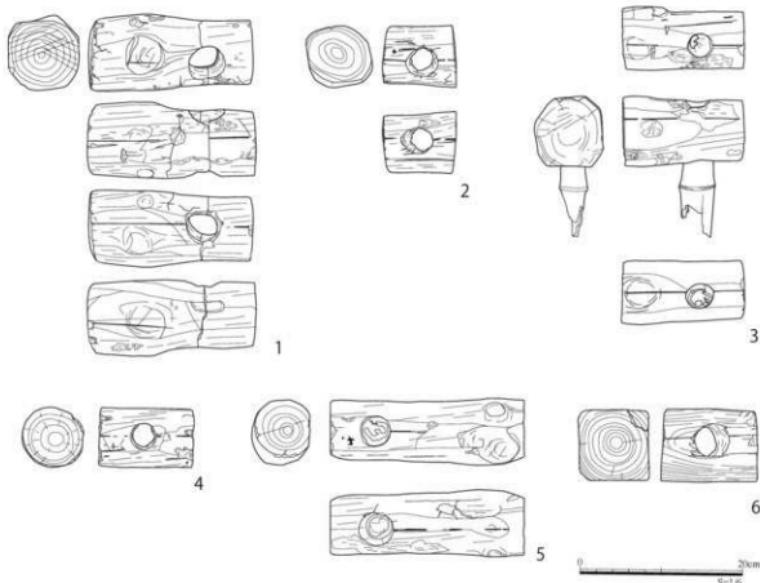
調査区北端で褐色粘質土（10YR4/4）の硬化面として検出した。平面形は不整形で褐色粘質土の厚さは一定せず、2～10cm程度である。貼り床の土間等の遺構の可能性が推測されるが判然としない。埋土から磁器皿が出土している。

#### SX07（第19・20図）

調査区中央付近で検出され、検出面で長軸3.05m、短軸1.8mの楕円形を呈し、深さは10cm程度と浅い。埋土はしまりのやや弱い黒褐



第16図 SD03 実測図



第17図 SD03 竹柄継手実測図

第5表 SD03 出土遺物観察表

図番号	種類	最大長(cm)	最大幅(cm)	備考
17-1	竹柄継手	20.2	7.8~9.3	継手1。4面に墨打ち線墨書
17-2	竹柄継手	9.0	6.8~7.8	継手2。2面に墨打ち線および番付墨書
17-3	竹柄継手	15.0	7.1~7.9	継手3。3面に墨打ち線墨書
17-4	竹柄継手	11.5	7.2~7.4	継手4。1面に墨打ち線および番付「十八」墨書
17-5	竹柄継手	23.9	6.8~7.0	継手5。1面に墨打ち線および番付墨書
17-6	竹柄継手	11.5	8.3~8.5	継手6。角形

色粘質土(10YR3/1)で焼土、炭化物、木片、礫を含む。やや黒味の強い軟質な範囲を遺構として調査したが、明瞭な掘り込みは確認できず機能等は不明である。2は陶器碗で外面に鉄絵と呉須で草花文が描かれる。3は磁器皿であるが、呉須の発色は悪く、渾む。釉薬には細かい気泡が混じる。

#### 【小穴】

検出した3基の小穴(SP05～SP07)は、いずれも調査区南壁面で検出した(第10図)。SP05およびSP07は南壁6層直下から掘り込まれている。SP06は6層との前後関係は定かではないが、SP05と埋土の質が似ており、同時期の構築と推測される。いずれの小穴からも遺物は出土していない。

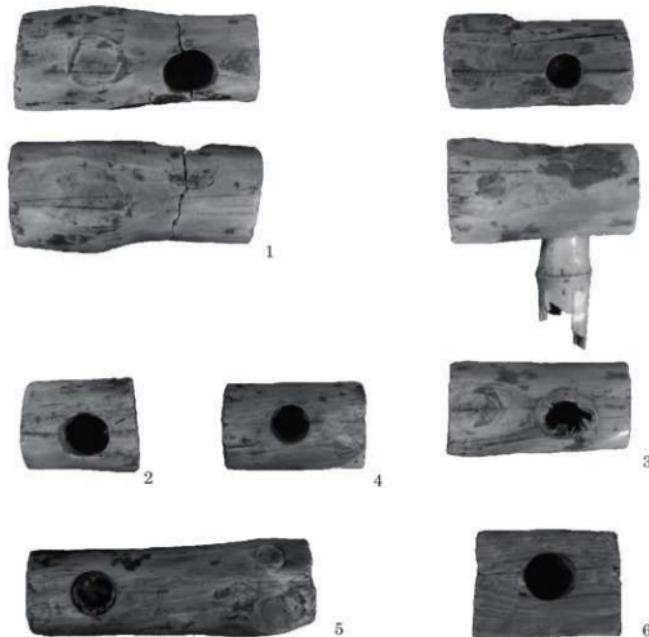
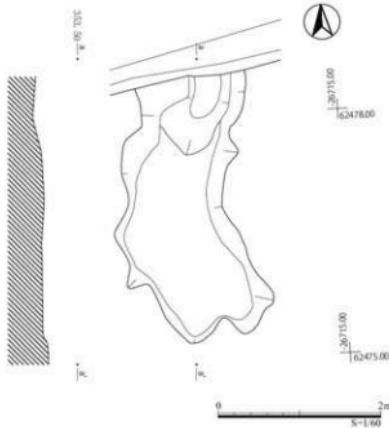
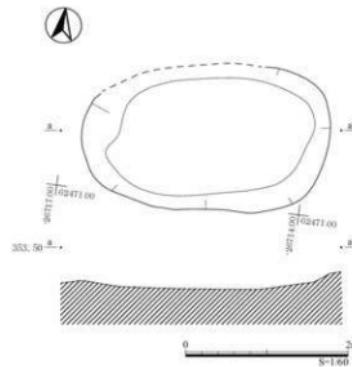


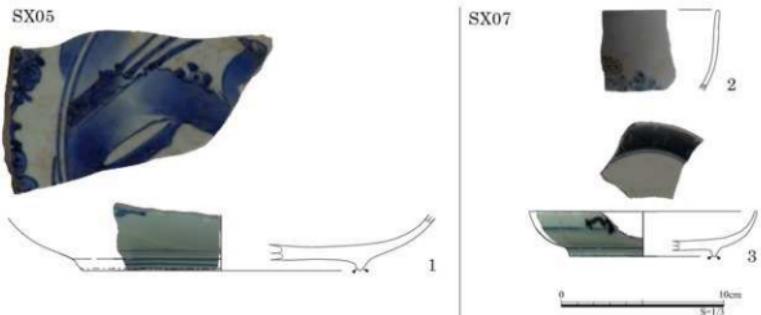
写真5 竹櫛継手



第18図 SX05 実測図



第19図 SX07 実測図



第20図 SX05・07出土遺物実測図

第6表 SX05・07出土遺物観察表

図番号	種類	器種	出土遺構	法量(cm)			釉薬	胎土	絵付/文様/特徴など	備考
				口径	底径	器高				
18-1	磁器	皿	SX05	—	17.0	(3.4)	透明	灰白色	染付/外面:團線、外底面:團線、肥前系、内面:文様有り/費付釉剥ぎ	18世紀末~
18-2	陶器	碗	SX07	—	—	(5.0)	透明	灰白色	染付/草花文/釉貫入	瀬戸・美濃系か
18-3	磁器	皿	SX07	14.0	9.0	2.8	透明	白色	染付/外面:團線・唐草文、外底面:團線、内面:濃み塗り、墨書き/釉貫入、費付釉剥ぎ	肥前系/五寸皿 1780~1860

## 2次面の遺構

2次面で検出された遺構は調査区北半に限られ、地下水位の高い軟質な検出面で精査を行い SX09、SK01 ~ 03、SP01を確認したものである。このうち明確な掘り込みを持つのは多量の木質遺物を出土した SK03のみであり、その他の遺構はやや軟弱な黒褐色粘質土の広がりを遺構としてとらえたもので、明確な平面プランと掘り方は確認できなかった。

### 【土坑】

#### SK03 (第21 ~ 24図)

SX09 調査中に角柱や板状の木材の集中部を検出し、SK03 として調査を行った。検出した木材の広がりは東西 2.5m、南北 1.5m を測り、完掘後の掘り方は東西 2.4m、南北 1.2m の長楕円形を呈し、底面はほぼ平坦である。木材の検出面から遺構下端までの深さは約 35cm を測る。木材の出土状況から、本来は土坑状の掘り込みに側板として木組みが施されていた可能性が考えられるが、構築時の状態を保っている木材は確認されなかった。木組みの土坑であったとすると、遺構側面の板材の検出状況から廃棄後に上からの圧力で側板の木組みが潰れた状況で今回検出されたものと推測される。埋土には漆器など木製品が含まれ、また東半分を中心に檜皮状の薄い木質が多量に含まれているが、陶磁器類の出土は少ない。遺構底面から陶器碗(3)および擂鉢(5)が出土している。

実測した遺物は1は磁器碗で口縁部を輪花に作り、口銷が施される。外面はコンニャク印判と手描きで梅樹文が染付される。2・3は施釉陶器の碗で、2は瀬戸・美濃系、外面に染付で模様が描かれる。3は全体の8割程度が残存する。褐色の胎土は緻密で、内外面施釉し、角高台の脛付は露胎、口縁部に四方櫛文を染付し、脣部に唐草文をイッチンで描く。造りは丁寧で、製作地は不明であるが、19世紀の遺物と思われる。4は施釉された

陶器皿で、透明に近い白色釉が内面に施される。5は内外面鉄軸が施された描跡で、7条一単位の卸目が、見込から脚部に放射状に施される。体部はロクロ整形され、高台は露胎で外底面は釉が難に拭き取られる。卸目は使用により磨滅する。

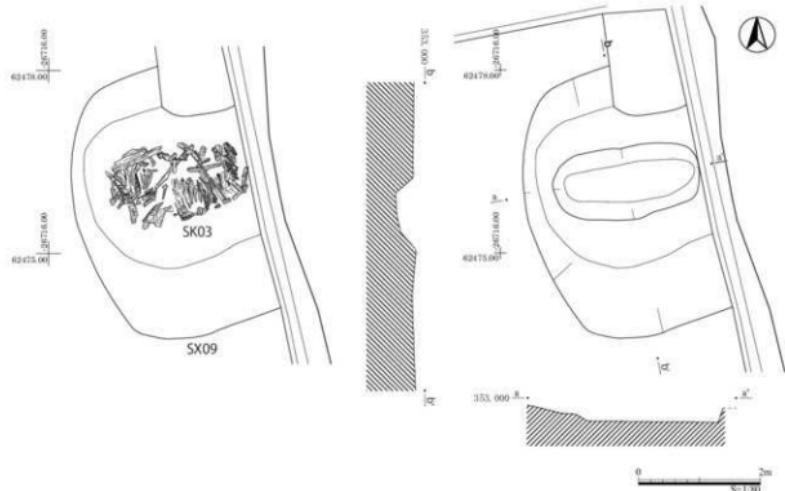
6～11は木製遺物で、6は内面赤漆塗りの漆器椀である。7は蓋の一部と思われるが、5か所に穿孔する。8は不明な木製品で中央に穴が開けられる。9は例り下駄である。

10・11は人名が墨書きされた木製遺物で、墨書きの内容から荷札木簡の可能性がある。なお以下の記述で木簡の表裏は便利的なものであり、使用順等を示すものではない。

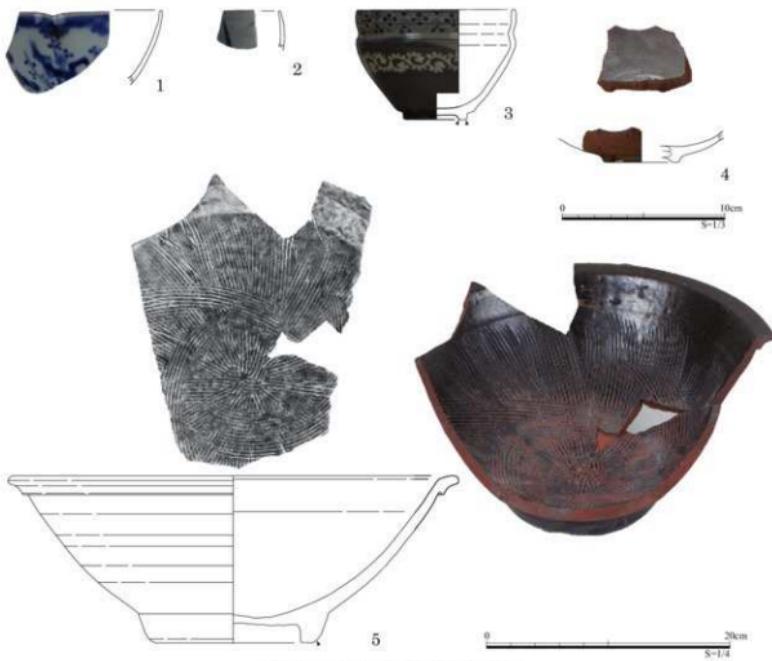
10（1号木簡）は上部は刃物を使って折り取られているが、長さ11.9cm、幅2.8cm、厚さ5mm、樹種はマツ科マツ属である。表面は平滑に調整され、表面に「□（木）亀松殿」、裏面に「浪江様□□□亀松」と記載されている。「浪江」・「亀松」は松代藩士である青木浪江と息子亀松が該当すると考えられる。

11（2号木簡）は上部は刃物で折り取られているが、長さ8.5cm、幅6.9cm、厚さ3mm、樹種はマツ科モミ属である。長辺に7か所小穴が開けられ、表面は平滑に調整され、角は面取りされる。小穴は木釘を打った痕と推測される。木簡表面には、右から「（祢）津数馬様」、「恩田木工」、「（鎌）原兵庫様」と列記され、「恩田木工」は他よりも1字下げて記載され、敬称もないことから木簡の発給者の可能性がある。裏面は中央に「祢津数馬」と墨書きされ、右側に「幕時出」、左側に「歷時着」「二箱之内」と小さく、荷の発着・内容に関する墨書きが書かれている。

SK03は、検出状況からSX09とした軟弱な地盤を掘り込んで構築しているが、遺構上部は後後に破壊を受け残存しておらず、SX09とした範囲内から出土した木製品についても、SK03の破壊によって周辺に散らばったもの可能性がある。SK03から出土した遺物は木簡のほか木質遺物が多い割に陶磁器は少ない。確実に遺構底面から出土したのは陶器の3・5である。SK03の使用状況は不明であるが、土坑状の掘り込みの側面に木材が並ぶ状況からすると、使用時に木組みで壁が造られ、底面は砂質の地山が露出する状況が考えられる。



第21図 SX09・SK03 実測図



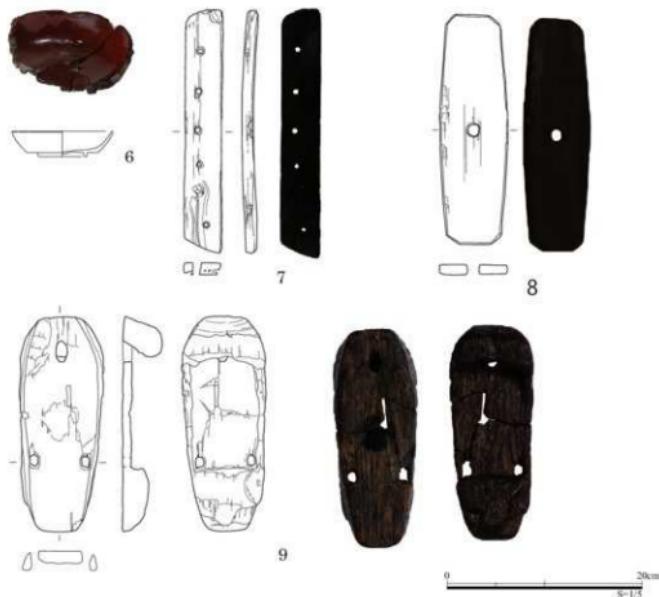
第22図 SK03出土遺物実測図(1)

第7表 SK03出土遺物観察表(1)

図番号	種類	器種	法量(cm)			釉薬	胎土	繪付/文様/特徴など	備考
			口径	底径	器高				
22-1	磁器	碗	—	—	—	透明	灰白色	染付/外側:梅瓣文/口縁	肥前系/18世紀末~
22-2	陶器	碗	—	—	—	透明	灰白色	染付/外側:草花文か/釉貫入	瀬戸・美濃系
22-3	陶器	碗	9.7	3.8	6.8	透明	褐色・織密	輪付け/外側:唐草文、四方擇文/化粧土、釉貫入、繪付無縫 唐草文様を描く。四方擇文は貝殻。	19世紀代か。化粧土の 上に白色イチヂン書きで 唐草文様を描く。四方擇 文は貝殻。
22-4	陶器	皿	—	4.5	(1.9)	白色釉	明赤褐色	内面施釉	即目7条一単位。上端ナデ彫え。 肥前系/
22-5	陶器	擂鉢	36.2	12.9	13.8	鉄釉	赤褐色	口縁折り返して口縁帯作り出し。 高台貼り付け	18世紀後半~19世紀 第3四半期

第8表 SK03出土遺物観察表(2)

図番号	種類	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	備考
23-6	漆器椀	口径 10.2	底径 5.0	器高 2.6	内面赤漆塗り、外面黒漆塗り
23-7	不明	24.9	3.9	1.2	5か所穿孔
23-8	不明	23.5	7	1.1	中心穿孔
23-9	下駄	22.1	8.6	4.1	削り抜き下駄



第23図 SK03出土遺物実測図(2)

#### 【池状遺構】

SX09(第21・25・26図)

遺構検出作業中に木製遺物の集中と軟弱な土層の広がりを確認したため、その範囲をSX09として調査を行った。南北4.4m、東西3.16mで深さ10cm程度と浅い。SX09調査途中で、木材の集中箇所をSK03としたため、SX09として取り上げた出土遺物の中にSK03のものを含み、また遺構の範囲確認が困難であったことから包含層遺物を含む可能性は否定できない。調査区東壁セクション(第11図)の観察から、第10層から落ち込みを確認することができる。なお第④～⑥層はSK03に伴う埋土の可能性がある。

本遺構については、平面形は隅丸方形を呈するが落ち込みは浅い。湧水の影響もあり木製遺物の集中を特徴とするが、遺構の機能については不明である。

出土した遺物は1～4が肥前系磁器である。1・2は碗の口縁から体部破片で、外面に染付がされる。1は所謂くらわんか碗である。3・4は皿で3は見込に染付がされるが発色が悪い。高台内側に焼成時の砂粒が付着する。4は輪花皿で内外面染付、釉に細かい気泡を含み、透明度が低い。

5～14は陶器である。5・6は内外面施釉した碗で、5は瀬戸・美濃系で腰部は削りで無釉、6は釉掛けされる。7・8は縁に柿袖を施した皿、8は内外面に煤が付着し焼明皿に利用された可能性がある。9は内外面柿袖で見込に段を作つて蛇の目釉剥ぎする。底部露胎し、高台は貼り付ける。見込に焼成時の重ね焼きの痕跡が残る。10は口縁から見込に緑色の灰釉が施され、底部は削り出し高台である。11は瀬戸・美濃系の輪花皿である。灰白色の胎土に透明釉を掛け、輪花は摘みて細かくつける。12は長石釉のかかる小皿で見込に鉄絵が施される。外底面は粗雑に釉が掛かる。



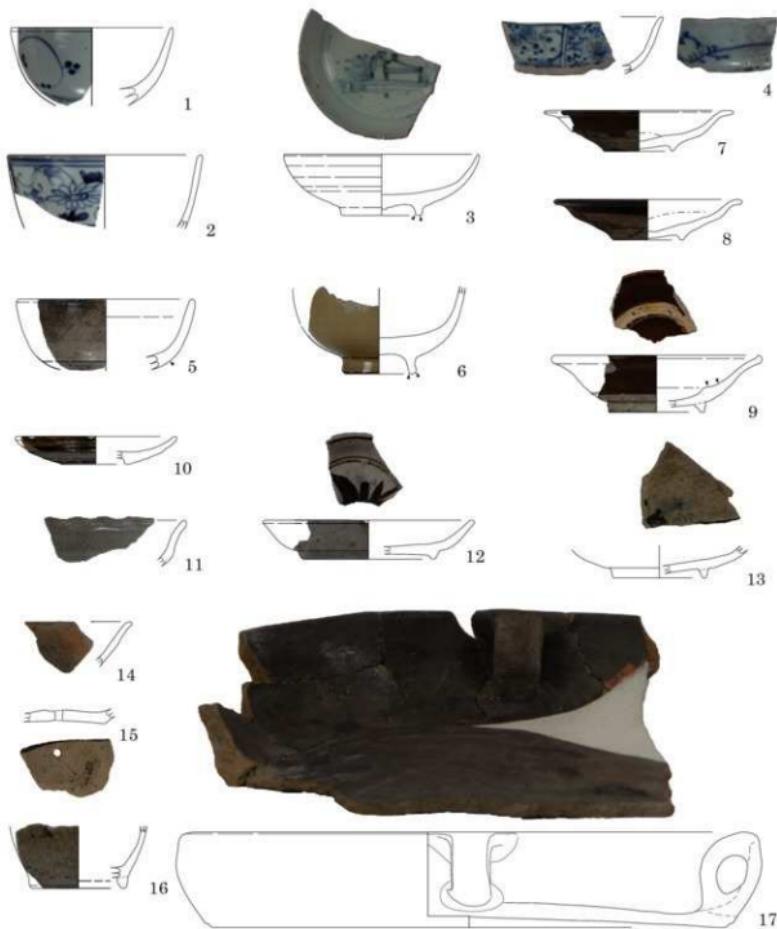
第24図 SK03出土遺物実測図（3）

第9表 SK03出土遺物観察表（3）

図番号	種類	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	備考
24-10	木箇	11.9	2.8	0.5	1号木箇。内面墨書き。荷札木箇か。マツ科マツ属
24-11	木箇	8.5	6.9	0.3	2号木箇。内面墨書き。7か所木割穴か。荷札木箇か。 マツ科モミ属

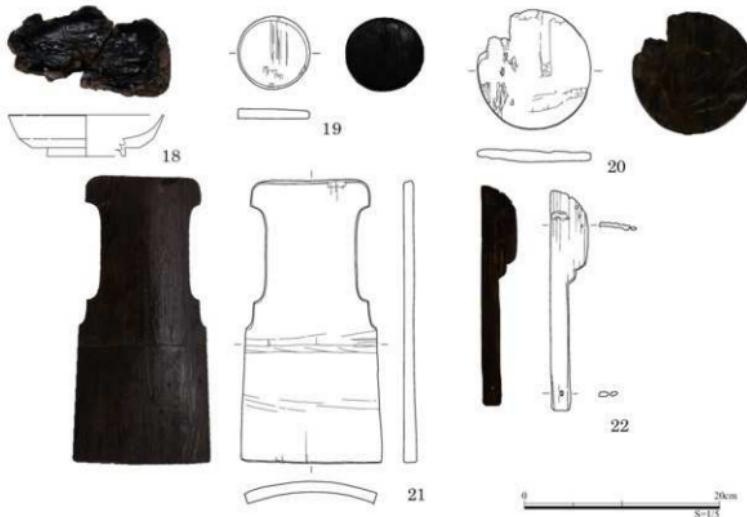
14・15は土器の皿である。15は底部片で1か所穿孔される。16は徳利と思われる瓶の底部片で、貼付高台で底部露胎、内面も釉が掛かる。17は内耳鉗である。体部はロクロ整形され、2か所に耳が貼り付けられる。外面に煤が付着する。

18～22は木製品である。18は漆器椀で、黒漆塗りで器高は低い。19・20は小型容器の蓋、21は桶側板である。22は杓子状の木製品であるが、柄先端に穿孔1か所がある他に杓子部分に3か所の穿孔が確認される。



第25図 SX09出土遺物実測図(1)

0 10cm  
5-13



第26図 SX09出土遺物実測図(2)

第10表 SX09出土遺物観察表(1)

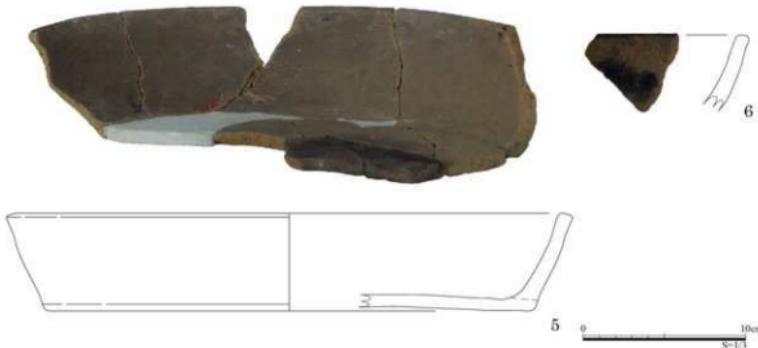
図番号	種類	器種	法量(cm)			釉薬	胎土	絵付/文様/特徴など	備考
			口径	底径	器高				
25-1	磁器	碗	9.8	—	(4.8)	透明	灰白色	染付/外面:梅花文/	肥前系/1780~1860
25-2	磁器	碗	11.8	—	(4.6)	透明	灰白色	染付/外面:菊文/	肥前系/1780~1860
25-3	磁器	皿	11.8	4.8	3.8	透明	灰白色	染付/見込:風景/鉢付輪削ぎ	肥前系/1780~1860
25-4	磁器	輪花皿	—	—	(3.5)	透明	灰白色	染付/外面:唐草文、内面:草花文/	肥前系/1780~1860
25-5	陶器	碗	10.6	—	(4.4)	灰釉	灰白色	腰部輪削ぎ、釉貫入	
25-6	陶器	碗	—	4.1	(5.3)	灰釉	灰白色	側付輪削ぎ、見込目跡あり、釉貫入	
25-7	陶器	皿	11.2	4.2	2.5	柿釉	淡灰褐色	削り出し高台	柿釉小皿
25-8	陶器	皿	11.2	4.2	2.5	柿釉	明褐色		柿釉小皿。内外面保付着
25-9	陶器	皿	12.6	6.0	3.5	柿釉	白色	見込部の輪削ぎ	
25-10	陶器	皿	9.8	4.2	1.8	鉛釉	灰白色	—/—削り出し高台	
25-11	陶器	輪花皿	—	—	(2.8)	透明	灰白色	釉貫入	
25-12	陶器	皿	12.8	8.2	2.4	白色釉	灰白色	絵付/蘭竹文/外底胎土目あり、釉貫入	瀬戸美濃系
25-13	陶器	皿	—	5.8	(2.0)	透明	灰白色	内外面施釉	
25-14	土器	皿	—	—	(3.0)	—	にぶい褐色	口縁部外反、表面磨滅、胎土砂粒含む	
25-15	土器	皿	—	—	(0.9)	—	灰白色	回転糸切り、底部穿孔、胎土緻密	
25-16	陶器	瓶	—	5.8	(3.8)	灰釉	灰白色	釉貫入	
25-17	土器	鍋	34.0	31.8	5.9	—	褐色	口クロ形、内耳2か所貼付、外腹保付着。	

第11表 SX09出土遺物観察表(2)

図番号	種類	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	備考
26-18	漆器椀	口径15.8	底径8.0	高4.25	内面黒塗り、外面黒塗り
26-19	蓋	7.4	7.4	1.0	
26-20	蓋	12.25	11.7	1.3	
26-21	輪削板	29.0	14.5	1.3	
26-22	杓子状木製品	22.65	3.85	0.5	柄先端に穿孔1か所、杓子部に穴が3か所



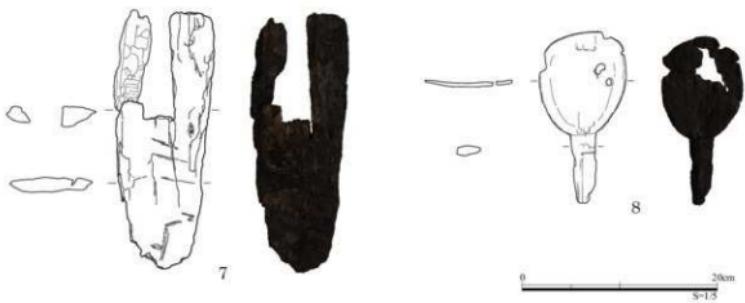
第27図 SK01・02・SP01 実測図



第28図 SK01出土遺物実測図（1）

第12表 SK01出土遺物観察表（1）

図番号	種類	器種	法量(cm)			釉薬	胎土色	絵付／文様／特徴など	備考
			口径	底径	器高				
28-1	磁器	碗	9.9	—	(4.4)	透明	白色	染付／外面：文様	肥前系/1780～1860
28-2	陶器	碗	—	—	(5.5)	透明	灰色	染付／外面：文様／釉質入	
28-3	磁器	小杯	7.1	4.8	5.0	透明	灰白色	染付／外面：草花文・團鶯，外底面：團鶯・不明文字／眞付釉剥ぎ	肥前系
28-4	磁器	小杯	4.8	2.0	2.4	透明	白色	染付／外面：草花文・眞付釉剥ぎ	肥前系
28-5	土器	焰燒	34.8	30.0	6.0	—	暗灰黄色		
28-6	土器	焰燒	—	—	(4.7)	—	暗灰黄色		



第29図 SK01出土遺物実測図（2）

第13表 SK01出土遺物観察表（2）

図番号	種類	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	備考
29-7	鏃先	26.3	10.1	2.1	
29-8	杓子	17.6	8.95	1.0	

#### 【性格不明遺構】

SX09の西側で黒色粘質土の広がりを検出し精査を行ったところ、土坑状の平面プランを2基検出した。しかしながら、調査の結果いずれも落ち込みは浅く機能及び構築時期については明確ではない。掘り込みが明瞭ではなく、何らかの遺構の底面を検出したものであるか判断しきれないが、ここでは性格不明の遺構として取り上げる。

#### SK01（第27・28図）

調査区中央西寄りで検出し、埋土は黒褐色粘質土（10YR3/1）でしまりは弱く、木片、炭化物、礫を含む。規模は長軸1.7m、短軸1.05m、深さ10cm程度で浅い。

出土遺物は1が磁器碗口縁部で外面に手描きで染付が施される。2は内外面施釉された陶器碗で外面に染付される。3・4は磁器の小杯で、3は外底面に染付で文字が描かれるが滲んで読めない。5・6は焰烙であり、口クロ整形される。7・8は木製品で7は鏃先、8は杓子である。

#### SK02（第27図）

調査区中央北よりで検出し、埋土は黒色の炭化物層である。径1.0mの円形を呈し、深さ5cm程度と浅い。

#### 【小穴】

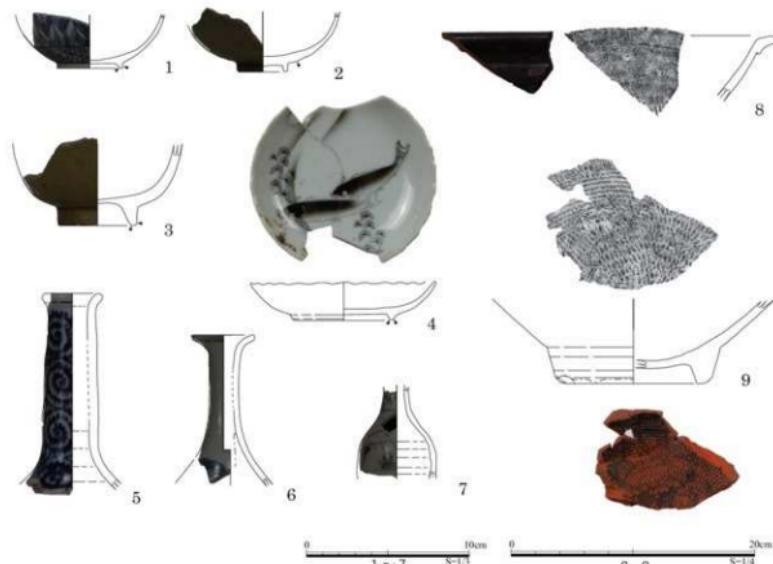
SP01（第27図）はSK02の南西に隣接する。SK01・02と同様に、黒色粘質土のプランを確認して遺構として調査したものであるが、落ち込みも浅く、明瞭な掘り込みを確認することはできなかった。長軸0.6m、短軸0.4m、深さ5cm程度と浅い。埋土は黒色の炭化物層であり、SK02と同一の遺構であった可能性がある。出土遺物はない。

#### 遺構外出土遺物

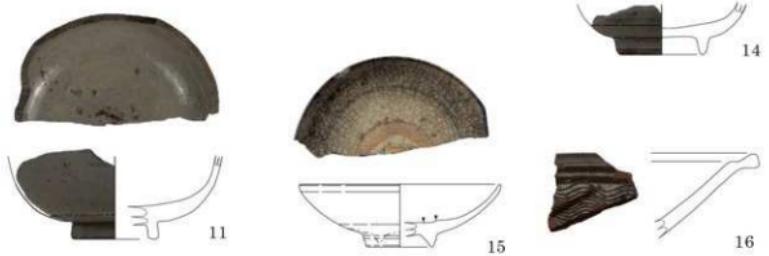
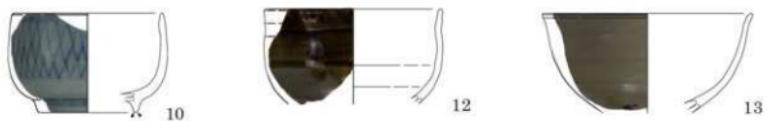
調査では遺構に伴わない遺物も多数出土した。層位ごとに取り上げることはできなかったが、1次確認面検出中に出土したものと、2次確認面検出中に出土したものに分けて以下に記載する。

1～9は1次確認面検出中に出土した遺物である。1は磁器碗で外面に手描きで矢羽文と氷裂文を描く。高台は小さく、釉に細かい貫入が入る。2・3は陶器碗で、2は貫入の目立つ灰釉が施され、底部露胎、高台は小さく削り出す。3は胎土が緻密で、貫入の目立つ灰釉が内外面に施され、貫付釉剥ぎされる。高台は削り出し、見込は器厚薄い。4は磁器皿で見込に双魚が描かれる。近代の遺物か。5～7は瓶で、5は蛸唐草文、6は手描きの染付が施される。7は小型の瓶で、内面に成形時の痕跡が螺旋状に残る。外面は染付されるが発色が悪く、暗く薄い。8・9は擂鉢。8は口縁部片で内外面鉄釉が施され硬質である。9は高台の付く肥前系擂鉢で、赤褐色のやや軟質の胎土に内外面鉄釉を施す。鉗目は放射状に施した後に見込周囲に横方向に施す。

10～21は2次確認面検出中に出土した遺物である。10は磁器碗で薄い青色の透明釉であるが細かい気泡がある。外面は手描きで網目文が染付され、高台に焼成時の砂粒が付着する。11～14は陶器の碗で、11は内外面灰釉、底部露胎、高台は削り出す。13は白く緻密な胎土に薄黄色の釉が掛かる端反り碗である。14は外面に染付がされるが発色が悪い。15は陶器皿で、三角形の高台が削り出される。内外面に貫入の目立つ灰白色の釉が掛けられ、底部は露胎。内面に染付されるが発色が悪く、見込は蛇の目釉剥ぎされる。17は縁がかった釉が施された大形の瓶の口縁部である。18は双耳の花瓶で透明釉が施される。19は鉄釉が内外面に施された鉢で、削り出した高台は露胎である。外底面に不明な墨書きが残る。20・21は擂鉢で、20は粗い胎土に全面鉄釉が施されたロクロ整形の平底の擂鉢で、9条一単位の鉗目が施され、鉗目は磨滅する。21は白色の胎土に鉄釉を施した擂鉢で、平底の底面に回転糸切り痕が残る。磨滅により判然としないが、細い5条一単位の鉗目が施され、見込は鉗目が放射状に施されていると推測される。



第30図 遺構外出土遺物実測図（1）



0 10cm  
S-13

第31図 遺構外出土遺物実測図（2）

第14表 遺構外出土遺物観察表

図番号	種類	器種	出土位置	法量(cm)			釉薗	胎土	繪付/文様/特徴など	備考
				口径	底径	器高				
30-1	磁器	碗	0~1次面	—	4.0	(3.3)	透明	白色	染付/外面:矢羽文・水裂文 / 豊付輪剥ぎ、袖貫入	肥前系/ 1780~1860
30-2	陶器	碗	0~1次面	—	3.0	(3.7)	淡緑釉	灰白色	—/—/削り出し高台	瀬戸・美濃系
30-3	陶器	碗	0~1次面	—	4.6	(5.1)	淡黄釉	灰白色・黒色粒	—/—/豊付輪剥ぎ、袖貫入	瀬戸・美濃系
30-4	磁器	皿	0~1次面	11.3	6.0	2.4	透明	白色	輪付付/見込:双魚 / 豊付輪剥ぎ	肥前系か
30-5	磁器	瓶	0~1次面	3.4	—	(12.2)	透明	白色・黒色粒	染付/暗唐草文 /	肥前系/ 1780~1860
30-6	陶器	瓶	0~1次面	3.8	—	(9.2)	透明	灰白色	染付/	肥前系
30-7	陶器	小瓶	0~1次面	—	—	—	透明	灰白色	染付/外面:唐草文・草花文 / —	瀬戸・美濃系
30-8	陶器	擂鉢	0~1次面	—	—	—	透釉	暗赤褐色	ロクロ整形	肥前系か
30-9	陶器	擂鉢	0~1次面	—	11.7	7.0	透釉	暗赤褐色	ロクロ整形、放射状・横方向に鋤目、高台下部ロクロ削り、高台指頭底有力	肥前系
31-10	磁器	碗	1~2次面	9.2	5.8	6.2	透明	灰白色	染付/外面:網目文・團線 / 豊付輪剥ぎ	肥前系/18世紀
31-11	磁器	碗	1~2次面	—	5.0	(5.1)	透明	灰色	—/—/目跡あり	肥前系
31-12	陶器	碗	1~2次面	10.8	—	(5.8)	淡緑釉	灰色	—/—/袖貫入	
31-13	陶器	碗	1~2次面	12.7	—	(6.2)	透明	白色	—/—/袖貫入	
31-14	陶器	碗	1~2次面	—	4.9	(3.1)	透明	灰色	染付/外面:不明 / 袖貫入	
31-15	陶器	皿	1~2次面	12.2	4.0	3.9	透明	灰白色		
31-16	陶器	鉢	1~2次面	—	—	(3.2)	透釉	赤褐色	白色化粧、刷毛目	肥前系/18世紀
31-17	陶器	瓶	1~2次面	14.0	—	(8.1)	透明	灰色		瀬戸・美濃系
31-18	陶器	瓶	1~2次面	7.4	—	(7.8)	透明	灰色	双耳・袖貫入	瀬戸・美濃系
31-19	陶器	鉢?	1~2次面	—	9.0	(4.2)	透釉	灰白色	外底面墨書き	
31-20	陶器	擂鉢	1~2次面	—	12.2	(3.5)	透釉	灰白色	鋤目 6条一單位	
31-21	陶器	擂鉢	1~2次面	—	7.4	(2.65)	透釉	白色	鋤目 5条一單位か、回転糸切り	

## 第5章 総括

本報告書は、松代城下町跡における長野信用金庫松代支店改築工事に伴う発掘調査の報告書であり、松代城下町跡発掘調査報告書としては6冊目となる。

調査地点は、近世城下町として発展した松代城下町のうち、上級家臣の屋敷地が並ぶ片羽町と町人町の伊勢町に位置しており、周辺における発掘調査成果などから、江戸時代後期を中心とした遺構の検出が見込まれた。

調査の結果、当初の想定通りに江戸時代の包含層が検出され、近世から近代の用水閑連遺構3基、火事場整理遺構3基、池状遺構1基、土坑1基、性格不明遺構5基、小穴7基を検出した。出土した遺物は18世紀後半から19世紀代の陶磁器を中心としており、木製品および金属製品も確認された。

調査は1次確認面を調査後、重機でさらに掘り下げ2次確認面の調査を行った。しかしながら、地下水位の高い地形の特性もあり、1次確認面における遺構プランの検出が困難であった。そのため調査時に検出した確認面が異なるものの1次および2次確認面の遺構について、時期差として捉えられているか判断が難しい。その上で、検出された遺構の廃絶時期を推測すると0次面が明治時代以降の近代に位置付られ、1・2次面の遺構は19世紀代の江戸後期から幕末にかけて廃絶したものと想定される。

遺構の検出状況についてあいまいな部分を残すものの、本調査において最も注目される成果は、SK03とそこから出土した木簡2点である。木簡の形態的特徴については前章で既述してあり、また墨書きの内容と意義については、既に田中によって考察されている（田中2022）。よって以下では田中の論考を参考にしてまとめ、木簡とSK03の使用時期について記すこととする。なお1号木簡および2号木簡とともに、両面に墨書きがなされているが、墨書きされた順番については不明である。従って以下の記述において、表面、裏面の呼称は便宜的なものであり、実際の使用の順番を示しているわけではない。

1号木簡裏面に墨書きされたのは青木浪江と青木亀松の親子であり、亀松から浪江に宛てた荷札木簡と考えられる。青木浪江・亀松は松代藩家中にあって番頭格といわれる上位35家に属しており、浪江は2号木簡に記される祢津数馬の叔父にあたる人物である。元文2（1737）年4月23日に造酒助から浪江に改名し、元文5（1740）年4月13日に江戸において御用人に任じられている。青木亀松は延享4（1747）年4月9日に亡父浪江の家督を相続し、番頭を務める。このことから1号木簡の使用時期は、1737年から1747年の間に推定される。

2号木簡表面に記された人名は恩田木工、鎌原兵庫、祢津数馬の三名である。ここに書かれた三名から、まず木簡の使用時期について考えると、中央に書かれた恩田木工民親が木工を名乗るのは、延享3（1746）年11月13日に家老に任命され、同月19日に木工に改名してから、宝暦12（1762）年1月11日に死去するまでである。祢津数馬は、元文5（1740）年に家老に任じられた記録が初出であり、安永8（1779）年5月9日に隠居となる。鎌原兵庫は、恩田木工、祢津数馬と同時代の者と考えると元文3（1738）年8月13日に藩主に初御目見えし、宝暦6（1756）年12月19日に死去した人物が該当する。以上の人々の経歴からすると2号木簡の使用時期は延享3（1746）年の恩田木工の改名から、宝暦6（1756）年の鎌原兵庫の死去までの約11年間であると考えるのが妥当である。また2号木簡表面については、管見の限り三名の人名の並べ方に類例は見当たらないが、荷札木簡と同様に送り状としての役割が想定され、中央の恩田木工には敬称がないことから、恩田木工が発給者となり、鎌原や祢津へ文書等を回観する送り状として利用されたと考えられる。

出土した2点の木簡の使用時期が18世紀中頃と推定されることから、SK03も同時期に既に構築されていた可能性が高い。しかし、遺構底面から19世紀に下る陶磁器が出土したことからするとSK03の存続時期が、50

年程度の長期間を想定しなければいけないことになる。さらに 18 世紀中頃の調査地点は、真田宝物館所蔵の菅沼資料「家中屋敷絵図」から家老格の河原舎人の屋敷が構えられていたとされ、その後、安永 8 (1779) 年に森木兵太夫の屋敷となり近代まで続いている（田中 2022）。つまり、SK03 の使用時期が想定される期間に、所有者が河原舎人から森木兵太夫へと変わり、地割も変わることとなる。以上のことから SK03 の利用法および遺構存続時期、特に木簡が SK03 に廃棄された時期について検討の余地が残されている。

以上、本調査によって松代城下町跡の新たな資料を得ることができたが、残された課題も多くある。木簡という文字資料によって、伝世資料との対比から遺物を直接使用したであろう個人に迫ることが可能になり、歴史上の人物の活動について検討する新たな材料を得ることができたのは、本調査の大きな成果である。



第 32 図 調査地の屋敷割復元図（田中 2022 より転載）

#### 引用・参考文献

- 青木一男・上田典男, 2000, 「総論」,『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書 松原道路 5』, 長野県埋蔵文化財センター報告書 36。  
安芸種子, 2005, 「江戸道跡出土のキセル—東大橋内遺跡における時期別様相—」,『東京大学本郷構内の遺跡-医学部附属病院外来診療棟地点』, 東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書 5, 東京大学埋蔵文化財調査室。  
江戸道跡研究会, 2001,『説説江戸考古学研究事典』,柏書房株式会社。  
大橋康二, 2004, 「世界をリードした磁器業・肥前窯」シリーズ道路を学ぶ 005, 株式会社新泉社。  
神奈川県埋蔵文化財センター, 2013,『平成 25 年度かながわの道跡展・巡回展 地中に埋もれた江戸時代の道具たち—かながわの町と村の暮らし—』, 神奈川県教育委員会。  
九州近世陶磁学会, 2000,『九州陶磁の編年』。  
公益財团法人瀬戸市文化振興財團, 2020,『令和 2 年度公益財团法人瀬戸市文化振興財团企画展 磁器生産の成立と展開—江戸後期の瀬戸窯と美濃窯』。  
瀬戸市史編纂委員会, 1993,『瀬戸市史陶磁史編』5, 爱知県瀬戸市。  
瀬戸市史編纂委員会, 1996,『瀬戸市史陶磁史編』6, 爱知県瀬戸市。  
竹内精良, 2008,『長野地域の江戸後期の陶磁器流通』,『第 18 回九州近世陶磁学会資料 江戸後期における庶民向け陶磁器の生産と流通 (東海・北陸・甲信越編)』, 九州近世陶磁学会。  
佐賀県立九州陶磁文化館, 2007,『佐賀県立九州陶磁文化館コレクション 古伊万里入門』, 株式会社青幻社。  
田中曉穂, 2022,「資料紹介 松代城下町跡から出土した木簡」,『長野市埋蔵文化財センター所報』No.33, 長野市埋蔵文化財センター。  
東京大学埋蔵文化財調査室, 1999,『東京大学構内遺跡出土上質磁器・土器の分類 (1)』,『東京大学構内遺跡調査研究報告書』2。  
長野市教育委員会, 1993,『松原道跡』, 長野市の埋蔵文化財第 58 集。  
長野市教育委員会, 2005,『松代城下町跡～中木町～西木町～柑屋町～』, 長野市の埋蔵文化財第 109 集。  
長野市教育委員会, 2005,『松代城下町跡 (2) ～殿町～』, 長野市の埋蔵文化財第 110 集。  
長野市教育委員会, 2006,『松代城下町跡 (3) ～殿町～』, 長野市の埋蔵文化財第 114 集。  
長野市教育委員会, 2022,『松代城下町跡 (4) ～代官町窓跡』, 長野市の埋蔵文化財第 165 集。  
長野市教育委員会, 2022,『松代城下町跡 (5) ～代官町～』, 長野市の埋蔵文化財第 166 集。  
長野市記録さん委員会, 2001,『長野市誌』第 3 卷, 歴史編 近世 1, 長野市。  
長野市記録さん委員会, 2003,『長野市誌』第 12 卷, 資料編 原始・古代・中世, 長野市。  
長野市記録さん委員会, 2004,『長野市誌』第 4 卷, 歴史編 近世 2, 長野市。  
中野雄二, 2004,『18 世紀中葉～19 世紀中葉の波佐見窯業について』,『金沢大学考古学紀要』27, 金沢大学考古学研究室。  
藤澤良祐, 2005,『瀬戸市跡群』, 日本の道跡 5, 株式会社同成社。  
平凡社編, 1988,『別冊太陽 古伊万里』。  
塙内秀樹・大貫浩子, 2021,『東京大学構内遺跡編年修正について』,『東京大学構内遺跡調査研究報告 14 2020 年度』, 東京大学埋蔵文化財調査室。

写真図版 1



1. 1次確認面全景（左が北）



2. 2次確認面全景（南から）



1. SD01・02 検出（左が北）



2. SD01 検出（南から）



3. SD01 断面（南から）



4. SD02 検出（南から）



5. SD02 検出（北から）

写真図版3



1. SD01 遺物出土状況（西から）



2. SX05 断面（南から）



3. SX06 検出（南から）



4. SX06 遺物出土状況（東から）



5. SD03 検出（北から）



1. SD03 検出（東から）



2. SD03 交点検出（東から）



3. SD03 交点検出（西から）



4. SD03 南壁断面（北から）



5. SK03 検出（東から）



6. SK03 完掘（北から）



7. SK03 漆器検出状況（南から）



8. SK03 調査風景（東から）

写真図版 5



1. SK03 材木検出（東から）



2. SX09 完掘・SK03 検出（南から）



3. SX09 遺物出土状況（西から）



4. SX09 遺物出土状況（西から）



5. SK01 遺物出土状況（西から）

## 報告書抄録

ふりがな	まつしろじょうかまちあと 6 ~かたはまち・いせまち~
書名	松代城下町跡（6）～片羽町・伊勢町～
副書名	長野信用金庫松代支店改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	長野市の埋蔵文化財
シリーズ番号	第168集
編著者名	井出靖夫
編集機関	長野市教育委員会・長野市埋蔵文化財センター
所在地	〒381-2212 長野県長野市小島田町 1414 番地 TEL 026-284-0004・FAX 026-284-0106
発行年月日	2023（令和5）年3月22日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因		
		市町村	遺跡番号							
まつしろじょうかまちあと 松代城下町跡	長野県長野市 まつしろじょうかまちあと 松代町松代字 いせまち 伊勢町 170-1 外	20201	F-033	36° 33' 45"	138° 12' 05"	(予備調査) 20210209 ～ 20210215	56m <sup>2</sup>	店舗改築 工事		
						20210401 ～ 20210428	214m <sup>2</sup>			
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構			主な遺物		特記事項		
松代城下町跡	集落跡	近世 近代	竹桶 溝跡 土坑			陶磁器 木製品 木簡	恩田木工 銘木簡が 出土			

### 概要

調査地は松代城下町跡の上・中級藩士が集住する片羽町と北国街道沿いの伊勢町に位置する。予備調査を伊勢町で行い、本発掘調査を片羽町で行った。江戸時代中期の絵図によれば、本発掘調査地は河原舎人の屋敷地に当たる。今回の調査では江戸時代中期から近代にかけての遺構を検出し、用水関連遺構、火事場整理遺構などを確認した。用水関連遺構では、松代城下町跡の調査で2例目となる竹桶を検出した。また性格不明の土坑SK03から多量の木質遺物とともに人名が墨書きされた木簡2点が出土した。そのうち2号木簡には、江戸時代中期の松代藩家老として著名な恩田木工の名前と家老格の鎌原兵庫、祢津數馬の名前が記されていた。恩田木工に直接関わる遺物が発掘調査によって発見されたのは初めてであり、江戸中期の家老の交流を知ることができる貴重な資料である。

長野市の埋蔵文化財第 168 集

松代城下町跡（6）～片羽町・伊勢町～

令和 5 年 3 月 22 日 発行

発行 長野市教育委員会

編集 長野市埋蔵文化財センター

印刷 有限会社アツーロ